11. 原野（はらの）・沢（さわ）遺跡　第１次調査

１．はじめに

原野・沢遺跡は志染川右岸の段丘上に、志染川に流れ込む小河川愛宕川と志染川に挟まれるように位置している。

周辺地の調査例は多くないが、山田・中遺跡や原野遺跡などで弥生時代終末から古墳時代・中世の遺構や遺物が検出されている。また、今回の調査地の西側には原野条里が遺存している。

この神戸市北区には箱木家住宅をその代表例とするように、室町時代から江戸時代初めころにかけての茅葺き民家が多数残存している。今回調査を実施することになった前中家住宅も17世紀中頃の創建が考えらる茅葺き民家であった。しかし、このたびその茅葺き民家が解体され新たに個人住宅が建てられることに伴い、茅葺き民家の基礎構造の検証を行うため神戸大学と神戸市教育委員会が試掘調査を実施した。その結果、新たに下層に中世の遺物包含層が遺存していることが確認された。そのため、茅葺き民家の基礎構造の考古学的調査とあわせて新たに建築される建物の基礎が、中世の遺物包含層および遺構面に影響を及ぼす範囲について発掘調査を実施することになった。

２．調査の概要

基本層序

地山面までの堆積土は多くなく、そのほとんどは近世茅葺き民家の建築の際の整地土であった。層序としては、第１層として茅葺き民家の湿気を防ぐための漆喰と炭層が観察され、その下層（第２層）には南側にやや厚い整地層が認められ、第３層に旧表土層、第４層が褐色土（縄文～中世の遺物包含層）となり、地山へ至る。

第１遺構面

今回発掘調査を開始する前にすでに茅葺き民家は解体されており、その際に礎石等も回収され、また、漆喰もその多くが旧状を保っていなかったために、炭層を取り除いた段階で最初の遺構面の精査を行った。

fig. 457
調査地位置図
1：5,000

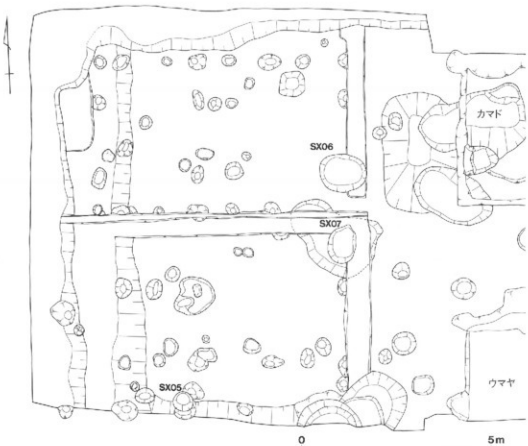


fig. 458
第１遺構面平面図

この炭層の下層には創建時の建物があったと推定される範囲について、黄色系の土を使用して化粧土状に厚さ最大10㎝で貼り土をしていることが確認できた。この貼り土面では、炭のつまったピットが多数検出された。

ピット　このピットの中には一部今回礎石を抜いた後に炭が流入したと考えられるものもあったが、多くは江戸時代に行われた改築の際の礎石の抜き跡と推定される。確実なものとして３か所の礎石が遺存していることが判明した。その中の１石には、墨による線が引かれていた。この礎石は神戸大学の調査の際にも図化されておらず、柱通りからも若干はずれるものであった。改築の際に礎石を再利用していた可能性も考えられる。建築の面からこれらのピットに関しては再検討する必要がある。

カマド　カマド（SX01）は近年まで使用されていた方形のもの（第Ⅳ期）以外に、方形のカマドの北と南にあわせて３時期のカマドを検出した。時期的にはその切り合い関係および土間の踏み固め土との関係から、北側のカマドが南側のカマドよりも新しいものである。当初（創建時とは限定できない）南側に築かれ（第Ⅰ期）、その後北側に移りそこで２時期（第Ⅱ～Ⅲ期）使用されている。南側のカマドは土間の下層で検出されたものであったことや水道管による攪乱のため、遺存状態が極めて悪いものであった。

ウマヤ　現在、コンクリートで固められたウマヤがあったが、そのコンクリートを除去して下層を精査したところ、地山を掘削して造られたウマヤであったため何時の段階で築かれた物であるかは明確にしがたいものであった。しかし、下層においても東側へやや傾斜するように掘り込まれており、水抜きの意図をもっていたものと推定される。

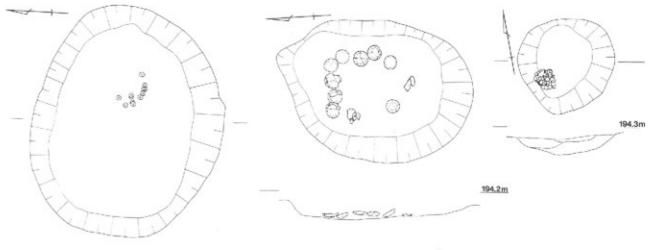


fig. 459　地鎮遺構平面・断面図（左：SX06　中：SX07　右：SX05）

fig. 460　SX07

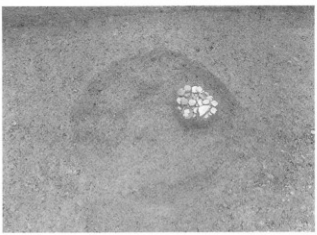


fig. 461　SX05

地鎮遺構　今回注目される遺構として、地鎮に関わると推定される土坑が３基（SX05～07）検出された。

SX05　調査区の南西で検出された直径約50㎝で、深さ約10㎝の不整円形の土坑である。この土坑の埋土は比較的砂質系の精良なもので、その中からは160個以上の磁器（伊万里系）・陶器（丹波系か）を加工した面子が出土している。他に遺物は全く出土していない。

SX06　調査区のほぼ中央部北側で茅葺き民家の大黒柱のすぐ北側にあたる。この大黒柱のすぐ南側にはやはり地鎮遺構SX07が検出されている。SX06は長径1.2ｍ、短径1.0ｍの楕円形の土坑で、深さは約20㎝である。この土坑からは寛永通宝が12枚出土している。ほかには全く遺物の出土はない。

SX07　長径1.0ｍ、短径80㎝の楕円形の土坑である。この土坑からは土師器の小皿が11枚出土している。この小皿は攪乱を受けているため一部に原位置を保っていないものもあるが、本来は方形に配列され12枚存在していたのではないかと考えられる。またこの小皿の方形に配置されたコーナー部から釘状の鉄片が出土しており、方形の木箱の中におさめられていた可能性も考えられる。

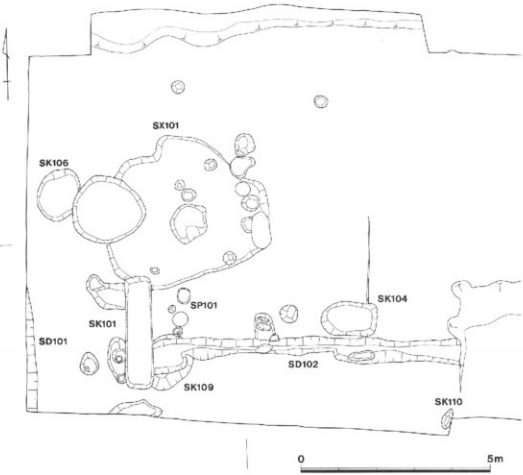


fig. 462
第 2 遺構面平面図

fig. 463
第 2 遺構面全景

第２遺構面　第２遺構面は地山面で検出された遺構面である。縄文時代後期の遺構と中世の遺構が同一面で検出されている。調査区の東半部は第１遺構面とほぼ同一レベルであったため、カマドやウマヤの削平を受けており遺構はあまり確認できなかった。そのため遺構は調査区のほぼ中央から西半部にかけて検出されている。また、削平を相当受けているようで、検出された遺構の遺存状況は良好ではなかった。遺物の出土がみられない遺構に関しては、その所属時期については判然としない。

縄文時代　縄文時代の遺構は土坑３基、埋甕３基、竪穴住居状の落ち込み１基がある。時期についてはすべて後期のものである。

土　坑　土坑（SK104・106・109）は、いずれもサヌカイトのチップを多量に含む土坑である。土器は少ないが深鉢片などが出土している。

埋　甕　埋甕は３基検出されたが２基は竪穴住居状の落ち込みの床面で検出されたもので、もう１基（SP101）は竪穴住居状の落ち込みの南で検出されたものである。いずれも縄文時代後期の深鉢が１個体埋設されていた。

SX101　竪穴住居状の落ち込み（SX101）は長径約4.0ｍ、短径約3.6ｍの不整楕円形で、深さは最も深いところで10㎝程度である。床面にはほぼ中央部に直径約1.2ｍの円形の浅い土坑があり、周辺部を中心にピットが10個確認された。そのうちの２個は前述した埋甕のピットである。埋甕以外のピットについて明確に柱跡と認められるものはなかった。しかし、床面はほぼ平坦に仕上げられていることや、中央の浅い土坑の周辺で少量ながら焼土が認められたことから、この土坑は竪穴住居の中央土坑であった可能性が考えられる。

fig. 464　竪穴住居状の落ち込み SX101

fig. 465　SX101 内埋甕出土状況

中　世　中世の遺構は溝２条、土坑３基がある。

溝　溝（SD101・102）は南北と東西の溝である。SD102は東西の溝であるが、この溝の北と南では段差があり、地山面を成形する際に生じた段差部分に掘り込まれたものである。あるいはこの溝の北側に建物が存在していた可能性も考えられる。

SK101　短辺80㎝、長辺3.0ｍの長方形の浅い土坑である。この土坑の床面から壁面の一部は赤色に変色し、炭が堆積していた。相当な火力を受けたものと推定されるが、その用途などについては不明確である。遺物はみられなかったが、切り合い関係から中世段階のものと考えられる。

SK110　ウマヤの西側で確認された土坑で大きく削平を受けていたものの、ほぼ完形に復元可能な須恵器壺2個体、土師器小皿4個体、小刀1本が出土している。墓への供献品もしくは建物の地鎮遺構であった可能性の2通りが推定される。時期は鎌倉時代初め頃である。

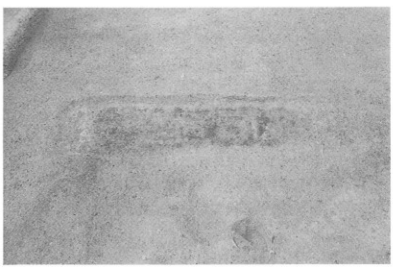


fig. 466　SK101

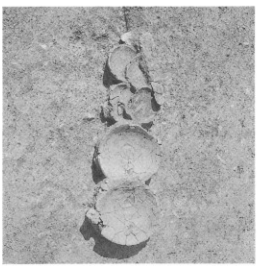


fig. 467　SK110遺物出土状況

3．まとめ

今回の調査では、予想されなかった縄文時代の遺構・遺物が出土するなど貴重な成果をあげている。

茅葺き民家（前中家住宅）下層の調査では、地鎮遺構と考えられる土坑が3基検出されている。詳細な時期については明確ではないが、建築の構造からは2回の改築がこれまで確認されており、3基の地鎮遺構は創建時、1回目改築、2回目改築（増築）に相当する可能性も考えられる。これらの地鎮遺構3基のうち建物の外側にあたるSX05は、出土遺物からみるとこの3基の中では時期的に新しいものになるものと考えられ、18世紀後半～19世紀前半の時期が考えられ、2回目の改築の地鎮に関する可能性が高い。このように異なった地鎮遺構が検出されたことは、今後の近世や中世の地鎮を考えていく上において極めて重要な資料と考えられる。今回検出された遺構については、今後、建築との関連からも検討を加えて行く必要があろう。

縄文時代の調査では、多くの成果をあげることができた。出土した土器で確認できるものはすべて後期（北白川上層式）のものである。この土器は後期初頭の中津式から縁帯文土器へ至る直前の型式にあたるもので、縁帯文土器成立直前型式として貴重な資料となるものである。また、石器を製作した際の極めて小さなサヌカイトチップが多量に出土しており、石鏃も20点近く出土している。これらは、竪穴住居状の落ち込みの中からは少量の出土で、この周辺の土坑内から多く出土しており、この遺跡では石器を住居址の外側で作っていたことをうかがわせている。

遺構では、市内の調査において後期の埋甕が検出されたのは初めてである。また、後期の竪穴住居状の浅い落ち込みも、住居址として捉えてよいものと考えられ、後期のものとしては、市内で初めての調査例となる。

以上のように多くの成果を得ることができたが、残された課題も多く、今後より詳細な遺構・遺物の検討が必要である。

12. 戎町遺跡　第14次調査

1．はじめに

西代・東須磨間の山陽電鉄は地表式軌道で山側・浜側の地域の分割や交通の円滑な流れの支障となっている。この現状を改善するため都市整備の一貫として神戸市・山陽電鉄・神戸高速鉄道が協力して軌道敷の地下化を図り都市環境の整備を行うことが計画された。

計画域の山陽電鉄板宿駅周辺には遺跡の存在することが予想され、昭和63年度に試掘調査を行い遺跡の存在することが明らかとなった。平成２年（第６次調査）には山陽電鉄板宿駅に当たる部分の調査を行った。今年度の調査地はこの北隣になり、地下駅から北側に抜ける連絡通路となる部分である。戎町遺跡は調査を重ね、件数も多く今回の調査は第14次調査となる。

2．調査の概要

遺構面は第１～第７遺構面の７面を検出した。各遺構面の時期は、第１・２遺構面は中世（12世紀前後）、第３遺構面は古墳時代（６世紀中頃）、第４遺構面は古墳時代前期頃、第５遺構面は弥生時代後期、第６遺構面は弥生時代中期、第７遺構面は縄文時代晩期～弥生時代前期である。

第３遺構面は調査区の南半部のみに検出された。第４遺構面については時期を確定できるような遺物が出土せず詳細については不明である。

fig. 468　調査区位置図

fig. 469
調査地位置図
1：2,500

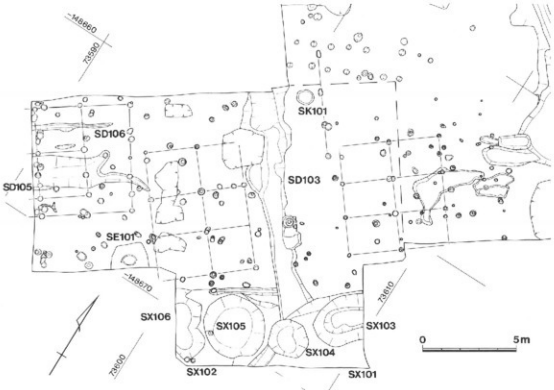


fig. 470
第１遺構面平面図

第１遺構面

中世遺物包含層である褐色泥砂を削除すると、灰色礫砂に切り込まれた遺構が検出される。

ピット約120基、掘立柱建物３棟以上、溝状遺構４条、落ち込み状遺構５基、土坑１基、井戸状遺構２基、井戸１基が検出された。

ピットは比較的多く検出され、直径30㎝、深さ20～40㎝ほどの規模のものがその多くを占める。しかしながら建物としてまとまるものは３棟程度である。当調査区の北、西、南側を今年度内に調査を行う予定があるため、第１遺構面平面図には当調査区内での掘立柱建物の案として示すに止める。

fig. 471　第１遺構面全景

SE101

調査区西部の南辺に検出された井戸である。掘形は、やや胴張りの一辺２ｍ前後の方形である。ただし調査区南辺に打設された土留杭による歪みも考慮せねばならない。掘形断面形はU字形で、深さは1.8ｍである。井戸枠は丸太を半截し半円に刳り抜いたものを２個組合わせる。北側の井戸枠がやや大きく直径90㎝、南側の直径70㎝である。さらに組合わせた合わせ目に幅30㎝、厚さ１㎝の（残存長1.6ｍ）板を当てている。東側には１枚、西側には４枚重ねて当てている。また北側の井戸枠下端面には、井戸枠掘え付けの際に、枠の高さ調整と掘形内での倒れ込みを防ぐためのものと考えられる幅20㎝、長さ40㎝、厚さ１㎝の板材が咬まされていた。

北側の井戸枠下面は弧線を描くような抉り込みがあり、外面に１辺３㎝、深さ２㎝ほどのホゾ穴が１か所穿たれ、手斧痕が観察される。調査時には内面にも同様のホゾ穴が２～

fig. 472　SE101 井戸枠出土状況

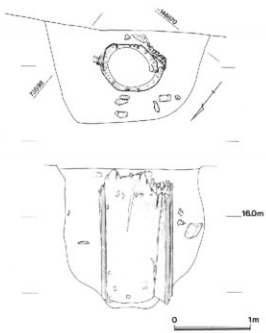


fig. 473　SE101 平面・断面図

3か所観察された。さらに井戸枠下端面にも同様のホゾ穴が両端に穿たれる。

南側の井戸枠下面はほぼ水平に切断されている。内面は手斧痕が無いように観察され、北側の井戸枠と同様のホゾ穴が3～4か所観察された。外面の様子については、調査時には観察出来なかった。

井戸枠内からは、須恵器・土師器・瓦器・白磁・青磁・曲物・板状木製品・下駄（2個体）・木片・竹片・種子類が出土した。井戸掘形からは須恵器・土師器・瓦器・木片が出土した。井戸枠内からは比較的多くの遺物が出土したが、遺物とともに人頭大の礫が多く検出され、均質な土を丁寧に埋めたと言う状況とは程遠い埋まり方であった。

SD103　調査区を南北に走る溝状遺構である。幅1.5～2.0 m、深さ0.2～0.4 mで断面形は浦鉾状である。SD103の南端は、落ち込み状遺構（SX101）に切られており、北側にものびるものと考えられる。

土師器・須恵器・瓦器・白磁・青磁・石鍋などが出土した。このなかの青磁小皿は二分の一の破片であるが、見込みに魚の陰刻があり、その描写は流麗である。神戸市内では稀少な例と思われる。

SD105・106　調査区西端で検出された溝状遺構である。幅40cmと30cmで、深さ10cmに満たないもので、ともに西へのびる。遺構内より土師器・須恵器が出土した。

SX103・104　調査区南端の黄色砂泥が堆積する落ち込み状遺構（SX101）の底面より検出された遺構である。SX103は一部調査区外となるが、東西3.0 m、南北2.5 m、深さ1.7 mの井戸状遺構である。断面形は緩やかなU字形で、底に直径36cm、深さ24cmの底のない曲物が入る穴を更に掘り窪めている。この曲物が掘えられた箇所は、第7遺構面の上層を覆う青灰色砂礫層にあたる。遺構内より土師器・須恵器・瓦器・漆器片・木片・石硯が出土した。SX104は、直径2.2 m、深さ1.4 mの井戸状遺構である。断面形はSX103と同様に緩やかなU字形である。最深部よりやや上の西側底面から直径26cm、深さ90cmの内面に黒漆を

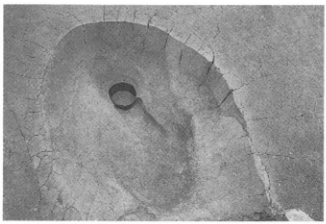


fig. 474　SX103

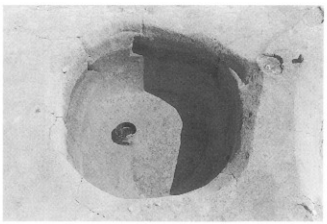


fig. 475　SX104

塗った曲物が出土した。その他遺構内より土師器・須恵器・瓦器が出土した。SX103の堆積土には多少の木片や有機物が含まれていたが、SX104の堆積土は有機物もほとんどなく礫も少ない砂泥であった。SX103・104ともに遺物の出土量は少ない。

SD104・105・106は、SD103で切られる東西5.4m、南北4.3m、深さ0.1mの落ち込み状遺構（SX102）の底面より検出された遺構である。

SD104　このSX102の北側の肩で検出された東西にのびる溝状遺構である。幅40cm、深さ10cm断面蒲鉾状を呈す。少量の土師器・須恵器が出土した。

SX105　直径3.0m、深さ0.7mで、断面形は浅い鉢状を呈すやや浅い落ち込み状遺構である。土師器・須恵器・瓦器・木片が出土した。平面形は円形であるが、深さから井戸としては考えにくい遺構である。

SX106　SX105の西隣に検出された南北4.0m、深さ0.4m、西側にのびる不整形のすり鉢状に落ち込む遺構である。完形の土師器皿とともに一部に面を持ったスサ入り焼土のブロックが検出された。このブロックが竈等の一部とも考えられ、遺構に投棄されたような状態で検出されたが、現状では遺構の性質とともに不明である。他に土師器・須恵器・瓦器・木片が出土した。

切り合い関係からSX105・106がSX103・104より古いことが分かる。しかしそれぞれの二者の新旧関係は不明である。調査区南辺にSE101も含めて5基の水溜もしくは井戸状遺構が集中する。同時に共存することはないが、調査の最終段階になって明らかとなったが、最下層の流路に堆積する砂礫層よりの湧水を目当てに掘られたようである。

SK101　調査区北東部で検出された土坑で、長径90cm、短径80cm、深さ10cmの楕円形の浅い遺構である。微量の土師器・須恵器が出土した。

第2遺構面　ピット約40基と水田の段が検出された。第2遺構面の遺物包含層は、第1遺構面のベース土であるが、全体に砂質で、調査区中央部では、砂利から礫を多く含む。第1遺構面の包含層（褐色泥砂）に比べて土器の出土量は少ない。土師器、須恵器、瓦器などが出土した。第1遺構面と時期差はそれほどないものと考えられる。また各ピットからの出土遺物もわずかであった。

柱穴は特に北東部で、第1遺構面と重なり合うように検出されるものがある。また第2遺構面の柱穴を抽出してみるとあまりまとまりがあるように考えにくい。このことから第

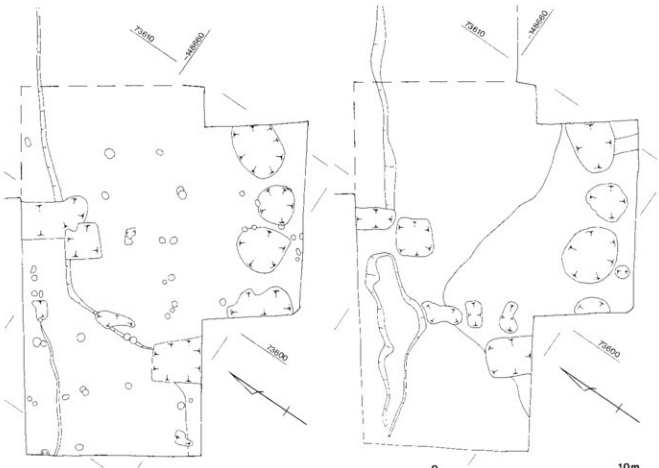


fig. 476　遺構平面図（左：第２遺構面　右：第３遺構面）

２遺構面で存在したおそらく短期間の建物が、ある時期の洪水で一部損壊し同様の箇所に柱穴を掘ったり、同様の規模で立て替えを行ったのではないかと思われる。このために重なり合う柱穴が検出されたと考えられる。第１・第２遺構面で掘られた柱穴のそれぞれの深さ・位置をより詳しく検討する必要がある。

第３遺構面　基本層序でもふれたが、灰色砂泥面（第４遺構面）の直上に黄色泥砂が覆う。北半部はほんのわずかで、最も厚くなる調査区南端部でも15cm程度である。黄色泥砂を削除すると調査区全体に偶蹄類（牛）の足跡が検出された。

遺構は、溝状遺構２条と水田址の段と考えられるもの１か所である。

SD301　東西にのびる浅い（幅約0.6～2.6ｍ、深さ0.1ｍ）不整形の溝状遺構で、土師器片がわずかに出土した。

SD302　断面は蒲鉾状で、幅約80cm、深さ10cmの溝状遺構である。須恵器１片と土師器片がわずかに出土した。須恵器片は比較的磨滅が少なく６Ｃ後半頃の坏である。

第３遺構面での出土遺物は少なく時期を決定することのできるものはこの須恵器片のみであるが、上下の層序からも現状では矛盾はないようである。因みに南接する第６次調査のこの遺構面では、出土遺物がなく弥生時代後期としていたが、少なくとも古墳時代以降と考えられるので訂正したい。

第４遺構面　溝状遺構１条とピット11基が検出された。ピットは、直径40～60cm、深さ20cmで特にまとまった出土遺物がなく、時期、性格などは不明である。

第５遺構面　ピット約50基、溝状遺構２条、土坑10基、落ち込み状遺構６基が検出された。遺構は西側に集中し、ほとんどのものが不整形で、遺構検出作業が難渋した。以下主な遺構についてのべる。

東半部のピット・土坑は、円形もしくは楕円形で深さ10cm前後で浅い。遺物もそれぞれの遺構から微量の弥生土器片が出土したにとどまり、特筆すべきものはなかった。

SX501～506　不整形の落ち込み状遺構で、底面からピットもしくはピットより少し大きめの土坑状の落ち込みが検出された。SX504などは当初円形を呈すように思われ、住居址とも考えられたが、住居址と断定するには至らなかった。

SX505－Ｐ５は、少し傾いているが長頸壺を逆さに置いたピットである。直径25cm、深さ20cmで壺は頸部は打ち欠いたように欠け、体部のみ出土した。算盤玉のような器形から吉備系のものであろう。時期はやや古いものとおもわれるが、住吉宮町遺跡にその類例がある。

SD503・504は溝状遺構としたが、SX501～506同様底面からピット状のものが検出される、浅い不整形の落ち込み状遺構であろうか。

西半部の各遺構からは、少量ではあるが弥生土器やサヌカイト片などが出土した。遺構はそれぞれ不整形でその性格は不明である。出土遺物から弥生時代後期でも新しい時期が考えられる。

fig. 477　第５遺構面

fig. 478　SX505－Ｐ５遺物出土状況

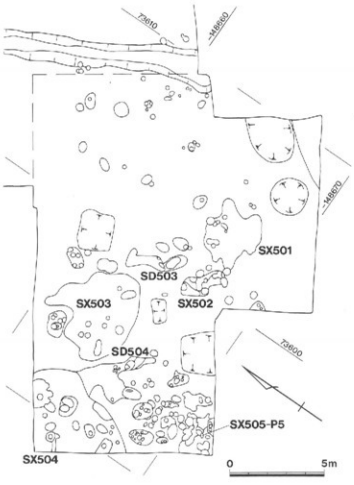


fig. 479　第５遺構面平面図

第6遺構面　落ち込み状遺構1基、溝状遺構2条が検出された。

SX601　南北約7m、東西約2.5m、深さ0.2mの落ち込み状遺構で少量の弥生土器が出土した。

SD602　調査区東南隅で検出された溝状遺構と思われる遺構である。遺構内は砂質の土砂が堆積していた。幅は不明であるが、深さ40cm程検出できた。少量の弥生土器とサヌカイト製石鏃1点が出土した。

SD603　幅6.5m、深さ0.8mの溝状遺構で、調査区西部でS字に蛇行するように検出された。溝の断面形は鍋蓋を倒様にしたもので、両肩から一段落ちさらにもう一段落ちる。二段目の落ちの断面形はV字状である。平面形から幅1.0m、深さ0.5mの溝状遺構が相似形を描くように見える。断面の観察から最深部から徐々に何度かにわたって溝内の堆積が進行し埋まっていったようである。少量の弥生土器とサヌカイト片が出土した。遺物から弥生時代中期頃と考えられる。

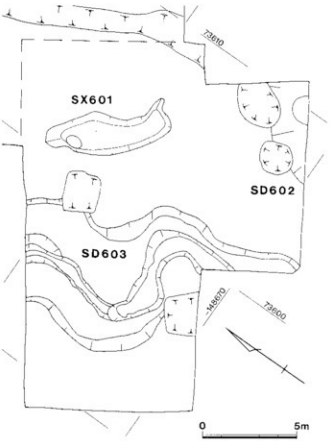


fig. 480　第6遺構面平面図

第7遺構面　縄文時代晩期から弥生時代前期の流路と東側へ落ちる落ち込み状遺構が検出された。それぞれ出土遺物の量はわずかである。落ち込み状遺構からは、ドングリのような種子類が土器とともに出土した。

東側の落ち込み状遺構は流路にくらべると比較的緩やかな堆積状況が窺える。しかしながら流路は第6次調査の調査結果と同様に、激しい洪水による砂と礫の堆積がみられる。

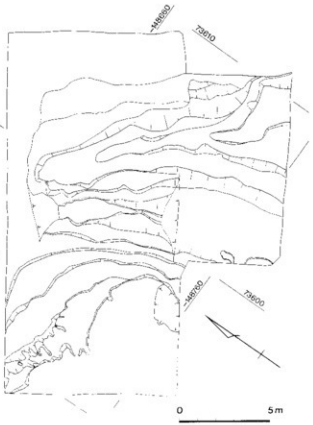


fig. 481　第7遺構面平面図

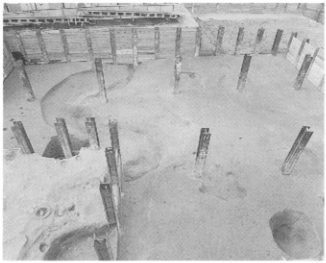


fig. 482　第６遺構面

fig. 483　第７遺構面

３．まとめ

断面模式図に示すように、南北断面では当然のことながら北に高く南へ堆積が序々に進んでいる様子が観察される。東西断面では、古墳時代から近世（第４～１遺構面）にかけては西から東に向かって堆積が進行しているが、弥生時代（第６～５遺構面）では東から西に向かって堆積の方向が逆転する。西から東に向かっての堆積は調査地の西に流れる現妙法寺川の溢流の影響を受けたものと推定される。かわって弥生時代頃は、現妙法寺川のような川が逆に遺跡の東側にありその影響を受けたものと推定される。小さい調査区での遠断は難しいが、少なくとも弥生時代から古墳時代にかけての時期に堆積方向が変化するような妙法寺川の流路の変化があったものと考えられる。

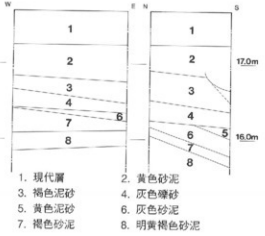


fig. 484　土層断面模式図

今回の調査で得られた成果として、中世では、掘立柱建物・井戸・曲物・石鍋・魚文青磁皿など遺構・遺物が多く検出され、豊かな当時期の集落を垣間見るようである。

奈良時代の遺構面はなく、古墳時代の遺構・遺物はあまりみるべきものはなかった。

弥生時代中期・後期は、直接集落に結びつく遺構・遺物はないが、当時の人々の営為がある。SX505－P５の遺構の示す性格は不分明であるが、長頸壺そのものは当地域のものではなく当時の交流の所産であろう。

最終遺構面の縄文時代晩期から弥生時代前期の流路は、当地域で稲作が始まる時期の遺構で、生活環境も自然環境も激しく変化した時代を象徴するようである。

最後に当遺跡は、第６次調査概要でも述べたように、当調査区内で住居址は検出されなかったが、弥生時代の摂津西端部の拠点集落としての位置付けは変わらないものと考えられる。

また中世においては、今回の調査地周辺に集落が展開していたことが言えよう。

13. 戎町遺跡　第19次調査

1．はじめに　戎町遺跡は、現在の妙法寺川下流域の東岸の扇状地の末端部から、自然堤防が発達するいわゆる沖積地に立地する遺跡である。これまで実施された発掘調査の成果から縄文時代晩期から鎌倉時代前半にかけての複合遺跡であることが判ってきている。

今回の調査は、都市計画道路山下線の街路築造工事に先立つもので、平成10年度完工予定の板宿駅前駐輪場の予定地にあたる。

2．調査の概要　今回の調査対象地は、暫定山下線の街路部分を含むものの、実際の施工が将来のため、調査完了時には埋め戻すことを前提に調整を行い、残土の仮置場を確保しながら調査を実施することとなった。さらに、板宿駅前立体改良工事予定地（第14次調査地点）および山陽電鉄ビル建設予定地（第15次調査地点）も隣接して工事を実施しており、掘削土は場外に搬出をしない方針を採ったため、総延長80ｍのうち、便宜上東半（１～４区）と西半（５～８区）に二分割して調査を実施した。

fig. 485
調査地位置図
1：2,500

第１遺構面　平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構面である。

SX106　１区で確認された幅2.9～4.4ｍ、最大深さ80㎝の落ち込みである。出土遺物には須恵器・土師器・瓦器・軒平瓦・木製品（下駄・板材）・獣歯・スサ入りの焼土塊などがある。

柱　穴　SE101と102との間にあたる２区では、柱穴が集中して確認されており、これらの柱穴で構成される掘立柱建物が２～３棟確認されている。いずれも第14・15次調査地点にのびるものであり、今後の資料整理作業によってその規模等がそれぞれ明らかにできるものと考えられる。

SE101　1区で確認された井戸の掘形で、第14次調査地点で確認されたくり抜き井戸からのびるものである。長径1.9ｍ、短径60㎝、最大深さ1.75㎝である。

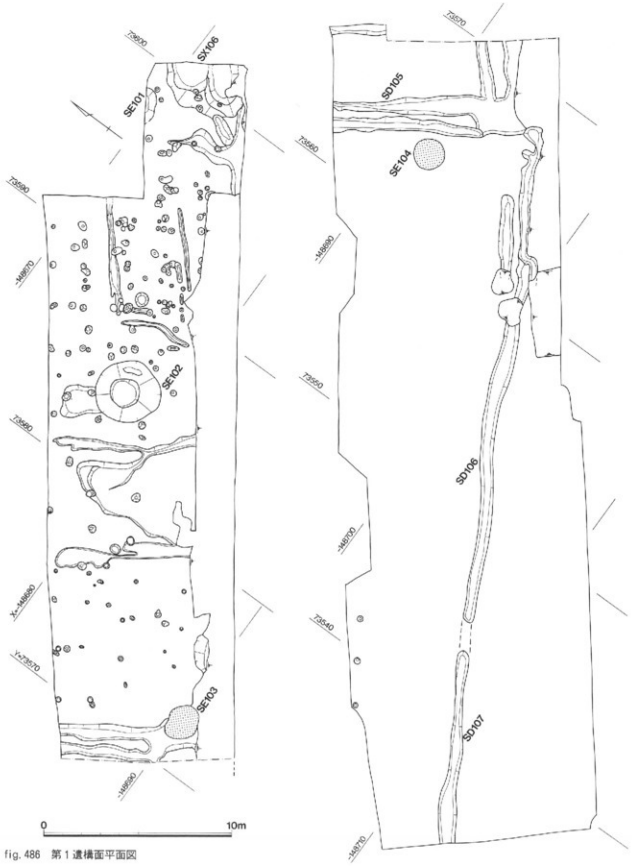


fig. 486　第1遺構面平面図

fig. 487　第1遺構面（1～4区）

fig. 488　SE102遺物出土状況

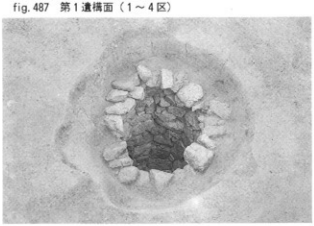


fig. 489　SE103

fig. 490　SE103半截状況

SE102　2～3区で確認された最大径3.3 m、最大深さ2.8 mの素掘り井戸で、遺構面から55cm下がった西北部の掘形壁面には幅30cm、長さ98cmの平坦面が掘り残されている点が注意される。階段のようにして使用されたのであろうか。また、掘形周辺には直径20～30cm大の柱穴が6基確認されており、何らかの上屋構造の存在が窺われる。中層部上層から完形品を含む須恵器・土師器・瓦器・木製品（板材・ツチノコ）・獣骨が、中層部下層からは先端部を擬宝珠形に加工した棒材が、下層からは完形の土師器大皿が2枚出土している。出土遺物から12世紀前半のものと考えられる。

SE103　4区で確認された石組み井戸で、掘形の直径2.1 mである。井側は花崗岩角礫を主に積んだもので、その内径は約1 mである。底には曲物が1段据えられた状態で検出できた。埋土の下半層から斎串、籠状木製編物、ツチノコ、曲物片などの木製品が出土している。出土遺物から13世紀後半のものと考えられる。

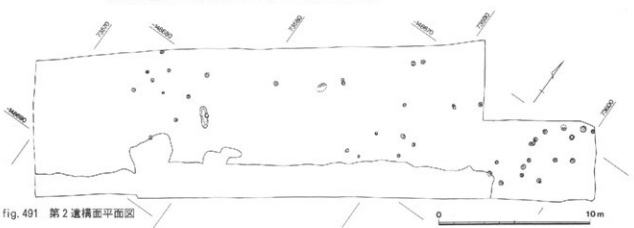


fig. 491　第2遺構面平面図

第２遺構面　第１遺構面と同様に、平安時代後期の遺構面と考えられる。遺構の頻度は低く、ピットなどが若干確認されているが、遺構のまとまりはない。なお、第１遺構面のピットと完全に重複するものも含まれているため、再考の余地がある。

第３遺構面　古墳時代後期～奈良時代頃の畦畔を伴う水田面である。確認できた畦畔は、２区で北東～南西方向にのびる下端最大幅80㎝のもの、４区で北西～南東方向にのびる下端最大幅30㎝のもの２条の合計３条がある。水田耕土層は淡灰色極細砂質シルトである。

第４遺構面　古墳時代前期（布留式併行？）の遺構面である。埋土が黄色極細砂である溝状遺構（SD401・402）と土坑（SX401・402）が確認された。また、４～５区では後述するSD501の最終埋土にあたる幅３ｍの落ち込み（SX403）が確認されている。いずれの遺構からも出土遺物は確認できていない。

第５遺構面　弥生時代後期後半～末の遺構面である。１～２区では遺構頻度が高いものの、不整形な落ち込みがほとんどである。一方、３～４区では土坑、落ち込み、ピットなどが確認されている。

SR501　４～６区では幅35ｍ、最大深さ3.5ｍの流路（SR501）が確認されている。埋没するまでに何度も流れを変えているが、西肩部では埋没の初層と考えられる状態で完形品を含む土器が多量に出土している。

fig. 492　第５遺構面（１～４区）

fig. 493　第５遺構面（５～８区）

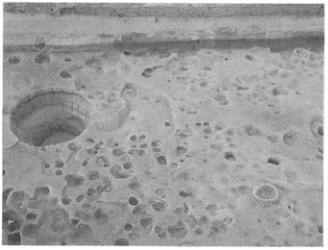


fig. 494　第５遺構面（２・３区）

fig. 495　SK501遺物出土状況

fig. 496　第5遺構面平面図（右：1～4区　左：5～8区）

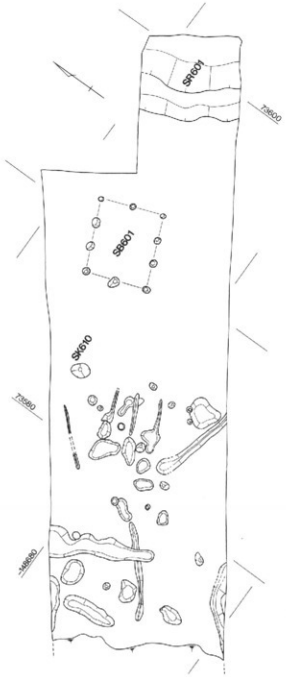
SX518　6区でSR501に接するようにして確認された、長径3.0 m、短径2.3 m、深さ約30cmの落ち込みである。完形品に近い弥生土器が15個体以上出土している。

SK509　8区で確認された、直径90cm、深さ15cmの土坑である。完形品の鉢を含む弥生土器が出土している。

なお、6～8区の第5面以下は幅4 mの調査区を設定して断割を実施したが、標高14.5 mまで無遺物の流路で、文化財は確認できていない。

第6遺構面　弥生時代中期の上層遺構面である。

SR601　1区では流路（SR601）が確認されている。第14次調査地点からのびてくるもので、その西側肩部が確認されている。



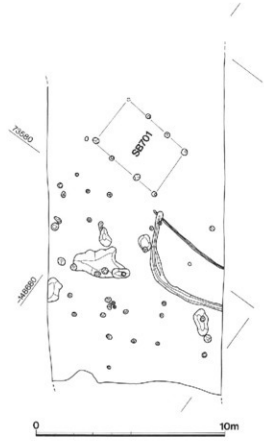


fig. 497　第6遺構面・第7遺構面平面図（左：第6　右：第7）

fig. 498　SB601

SB601　2区では2間（3.4 m）×3間（4.0 m）の掘立柱建物（SB601）が確認されている。

SK610　2区で確認された長径107 ㎝、短径83㎝、深さ29㎝の土坑である。埋土上層からは在地産の弥生土器とともに、生駒西麓産の口縁部を簾状文で飾る壺型土器片が出土している。

第7遺構面　3～4区のみで確認できた弥生時代中期の下層遺構面で、土坑、溝、落ち込み、ピットなどの遺構がある。

SB701　3区では3間（4.2 m）×1間（2.8 m）の掘立柱建物（SB701）が確認されている。いずれも柱痕が南東方向に倒れている点が特徴的である。

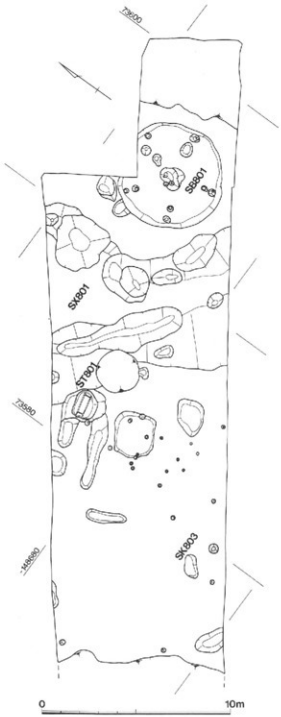


fig. 499　第8遺構面平面図

fig. 500　第8遺構面（1～4区）

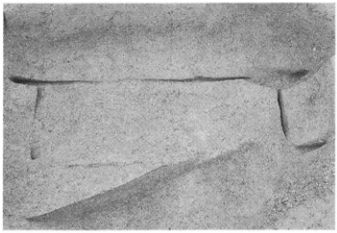


fig. 501　ST801

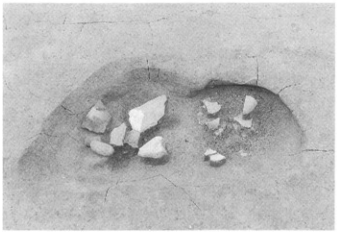


fig. 502　SK803

第８遺構面　弥生時代前期の遺構面である。竪穴住居１棟、流路様の落ち込み１条、木棺墓１基、土坑、ピットなどが確認された。

SB801　１～２区にかけて確認された直径5.6 m、壁高15cmの円形竪穴住居で、埋土は灰色シルト質細砂である。中央土坑１基、ピット12基が床面で確認できたが、柱は６本柱と推定できる。出土土器は少量であるが、埋土をすべて水洗選別したところ、サヌカイト製石鏃11本、チャート製石鏃１本、石錐１本をはじめとした石製品が多量に出土している。

SX801　２区で確認された最大幅10.5 m、最大深さ58cmの流路様の落ち込みで、調査地区内を横断している。完形の壺形土器をはじめ、多量の土器・石器が出土している。

ST801　２区で確認された木棺墓である。長径165 cm、短径123 cm、深さ30 mの楕円形に近い土坑の底に木棺が掘られたものである。木棺の板材は腐朽して残存していないが、暗灰色極細砂質シルト層でその痕跡を知ることができる。棺材の組み合わせは長側板で小口板を挟み込んでおり、それぞれの棺材が墓坑底面に突き刺さっている。その深さは小口板が長側板よりも深く、最大で約８cmを測る。木棺の内法長さ98cm、幅35cmで、確認できる側板の最大高さは10cmである。

SK803　３区で確認された長径129 cm、短径67cm、深さ26cmの土坑である。埋土下層からは板状のサヌカイト原石１点と在地産の弥生土器片が、上層からは完形に復元できる生駒西麓産の壺型土器片が遺物包含層から落ち込んだ状態で出土している。

第８遺構面下層　第８遺構面の調査が完了した後、縄文時代晩期の遺物包含層の有無を確認するため、幅２mのトレンチを設定して調査を実施した。黒灰色シルト層から縄文時代晩期と考えられる土器細片がわずかに出土したが、今回の調査地点では遺構面としては認定できなかった。

３．まとめ

今回の発掘調査では、以下のようなさまざまな成果が得られた。

①縄文時代晩期では、遺跡の立地が想定しにくいこと。

②弥生時代前期では、これまでの調査地点と異なり、竪穴住居と木棺墓などの集落本体を想定させる遺構が確認されたこと。出土した土器も前期後半の中でも削出突帯を含む古い文様要素をもつ土器が明らかに含まれており、戎町遺跡内での集落立地形態の復元に有益な成果と考えられる。また、生駒西麓産の土器も少なからず含まれており、地域交流を考えていく上でも重要な資料と言える。

③弥生時代中期では、遺構面が２面確認されたにもかかわらず、これまでの調査地点と異なり、遺構頻度も低く、石庖丁などの石製品の出土もなく、相対的に遺物量の少ない点が特徴的である。

④弥生時代後期～末では、SR501で確認された多量の土器群が特筆できる。遺物整理ができていない現段階では詳細を報告できないが、少なくとも当時の土器様相を知る上での一括資料として有効な資料と言える。

⑤第３遺構面の水田畦畔の平面的な確認は、初めての成果である。

⑥平安時代後期～鎌倉時代前期では、掘立柱建物と井戸で構成される集落遺構が確認できた。隣接する第６・14・15次調査地点の成果とあわせて、集落形態が復元できていくものと考えられる。遺物からみても瓦器の出土比率の多い点が特筆できよう。今後の遺物整理作業でその様相を明らかにできるものと考えられる。

14. 垂水・日向遺跡　第12次調査

1．はじめに

垂水日向遺跡は、昭和63年度より調査が実施されており、縄文時代中期から中世に至る複合遺跡である。縄文時代においては海岸線近くにあたり、数多くの流木や枝葉などの自然遺物が出土した自然流路や、日本最古のヒトの足跡などが検出されている。平安時代から中世においては漁村と考えられる集落が検出されている。

2．調査の概要

今回の調査は、銀行店舗の新築工事に伴い実施したもので、第1次調査地点の北隣に当たる地点である。

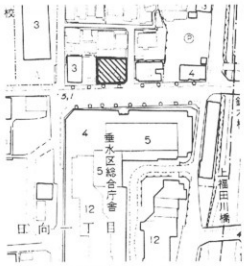


fig. 503　調査地位置図　1：2,500

第1遺構面

現代の盛土直下で中世の遺構面が検出された。調査区北半部分は宅地および耕作によって削平されており、遺構面は失われている。調査区南半部分も多くの部分が後世の影響を受けているが、溝、ピットなどがわずかに検出された。遺物は包含層よりわずかに出土したが、時期を確定しがたい。

第2遺構面

平安時代の遺構面で、流路が3条検出された。

SD201

東西に流れる流路である。幅2.5～3.0m、深さ50～80cm程度の規模で西に流下し、福田川からの用水の引き込みに使用していたと考えられる。埋土から11～12世紀の遺物が検出された。出土状況より原位置を保っているとは考えられない。

SD202

SD201に流れ込む流路で、幅1.2m、深さ20cm程度の規模である。遺物は出土しなかった。

SD203

SD201から流れ込む流路で、幅1.0m、深さ20cm程度の規模である。SD201から水を引き込む施設であると考えられる。取り付き部分に、補強のためと考えられる杭の痕跡が数か所検出できたが、堰等の施設は無く詳細は不明である。末端部近くで完形の須恵器壺が出土している。

第3遺構面

第2遺構面以下は、基礎部分のみの調査となり、幅1.5m程度のトレンチ調査を実施した。第3遺構面に至るまでに、数枚の面が確認できたが、遺構は検出されなかった。縄文時代から古墳時代後期に至る遺物が出土した。

第3遺構面は第1・第2遺構面とは違い、調査区北半部分は平坦である。平坦面全面に偶蹄目の足跡が検出された。調査区南半部分は急激に落ち込み、粗砂、砂礫を主体とする埋土が堆積している。3・4トレンチでは枝葉を主体とする有機物の堆積が認められたが、土器の出土はわずかである。

第4遺構面

工事影響範囲の制約により、平面での検出はできなかったが、断面観察により、上面で検出された落ち込みの下層から、足跡、火山灰層などの痕跡が確認された。足跡、火山灰層共にこれまでの調査で検出されている土層と同一層であり、縄文時代中期の遺構面が当調査区にまで広がっている事が確認された。

3．まとめ

今回の調査地点の立地する箇所は、これまでの調査地点に比べて傾斜がきつく、第３遺構面を除いて土層の水平堆積がみられない。そのため、集落を形成するには至らず、遺構の密度は希薄であった。中世においては柱穴などがわずかであるが検出されており、南接する第１次調査地点において同時期の集落が検出されていることから、本来は集落が広がっていたと考えられる。しかし、後世の整地や洪水などにより失われている。弥生時代から古墳時代かけては当遺跡は遺構の存在は希薄である。第３遺構面で検出された平坦面は人為的なものと考えられる事から、水田として利用されていたと考えられる。しかし、地形的に不安定な立地条件であるため、洪水の被害を受けており、有効な土地利用は困難であったと考えられる。縄文時代においては、当時の汀線付近に残された足跡や降下火山灰が確認された。これらは、従来の調査結果と同様の様相を呈しており、集落等の生活の痕跡を見いだす事はできなかった。

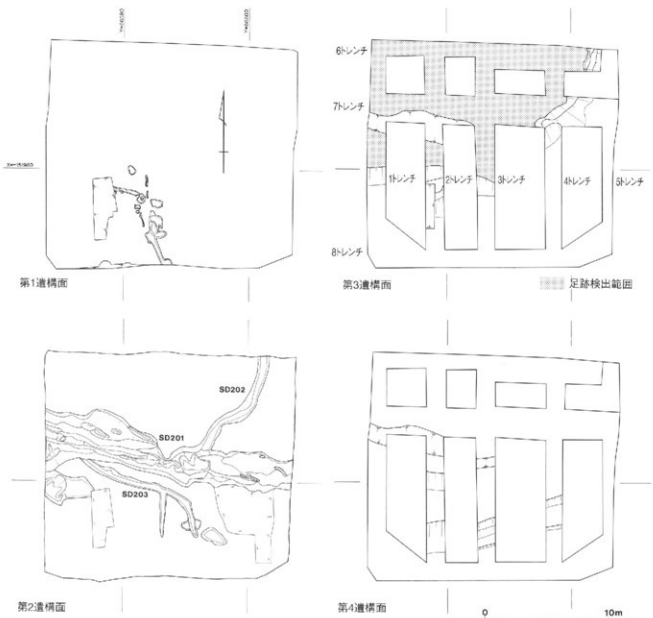


fig. 504　遺構平面図

15. 舞子窯（まいこよう）遺跡　第２次調査

1．はじめに

舞子窯は、寛政年間に開窯され、一時廃絶しながらも大正時代末まで続いた窯として知られている。その製品は舞子焼の名で親しまれ、明石城下の武家屋敷の発掘調査の際に出土していることから、近年注目されつつあった。また近代の文献に窯の場所についての記述があり、おおよその所在地が知られていたが、平成２年のマンション建設に際して眞野修氏が窯体を発見し、発掘調査が行われた。今回の調査地は、そのマンションの西側に隣接する地区で、市営駐輪場建設に伴う発掘調査である。第２遺構面以下の層に関しては特に建築工法との関係から建物の基礎部分６か所のみを調査した。

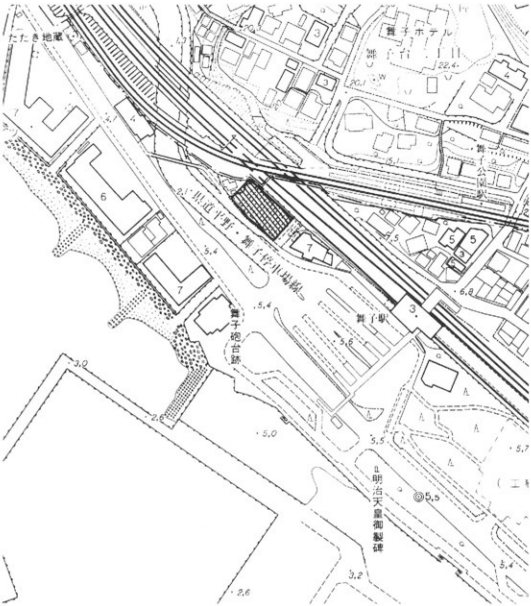


fig. 505
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

第１遺構面

現況は旧地形にくらべ１ｍ強削平を受けているようである。したがって調査の時点では、舞子窯が営まれた地表面は存在せず調査の対象となったものはすべて攪乱土内より出土したもので、旧状の位置を保つ遺構、遺物は存在しなかった。

出土遺物　出土遺物については以下に記す種々のものがあった。窯体と考えられる耐火煉瓦。窯道具として、ハリ、小円板、より輪、つく、さや、製品としては灯明皿、小坏、湯呑、蓋、行平鍋、土瓶、急須、鉢（向付？）などがあり、中に施釉前の行平鍋も検出された。ほかに施釉薬を一時的に小皿にとってそのまま遺棄されたと思われる皿がある。

出土した製品の行平鍋の把手に「衣宗」の陰刻、「干」の刻印、また、湯呑底部に「まひこ」の刻印のあるものが出土した。「衣宗」については「明石城下搬入の周辺諸窯の製品」（村上泰樹「歴史と神戸」第33巻4号1994）等にあるように舞子焼の流派の一つとしてあげられる衣笠宗兵衛（寛政ごろ）にあたるかと考えられる。しかしながら出土遺物の時期とすべきかは定かではない。なお当調査地の西約200ｍ国道2号線沿にある「タタキ地蔵」を祀る域内に「衣笠氏」「慶応丙寅年（1866）」銘のある宝篋印塔がある。舞子窯に関わる衣笠氏の縁あるものであろうか。

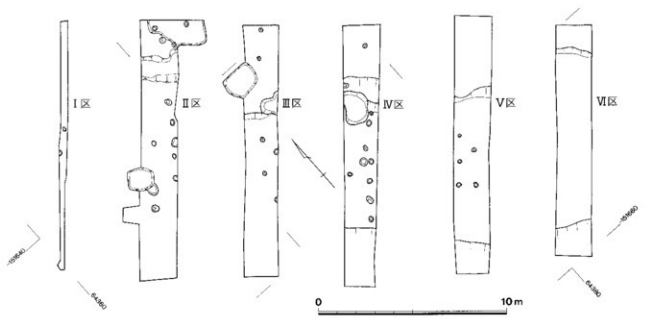


fig. 506　第2遺構面平面図

第2遺構面　第1遺構面の下層には、無遺物の砂層が2層堆積しており、その下層は暗茶色の砂泥層となる。この暗茶色砂泥層は中世の土器を多く含む遺物包含層であり、さらにその下層の暗茶色砂泥層上面で、遺構を検出した。検出された遺構は土坑4基、ピット多数であるがこの層は、南へ急に下がるように傾斜しており、調査区の南端では遺構面は検出できなかった。また、ピット相互の関係についても不明であり、掘立柱建物などの明確な遺構は確認できなかった。これらの遺構の個々の時期については出土遺物が未整理のため不明であるが、調査時の所見ではいずれも10世紀頃と考えられる。

I　区　ピットを2個検出した。いずれも直径20cm程度で、深さは約45～50cmである。

II　区　土坑1基とピット11個を検出した。

SK04　調査区の南側で検出された。長径40cmの南北に長い楕円形で、深さは10cmと浅い。埋土内から巻き貝の殻が2～3個、土師皿片を伴って出土している。貝の種類は不明だが、にし貝の可能性がある。

Ⅲ　区　　このトレンチでは、トレンチの中央部分で第２遺構面の上層に暗茶褐色粗砂が堆積しており、その上面で土坑が２基出された。この層はⅢ区のこの部分にのみ堆積しており、他

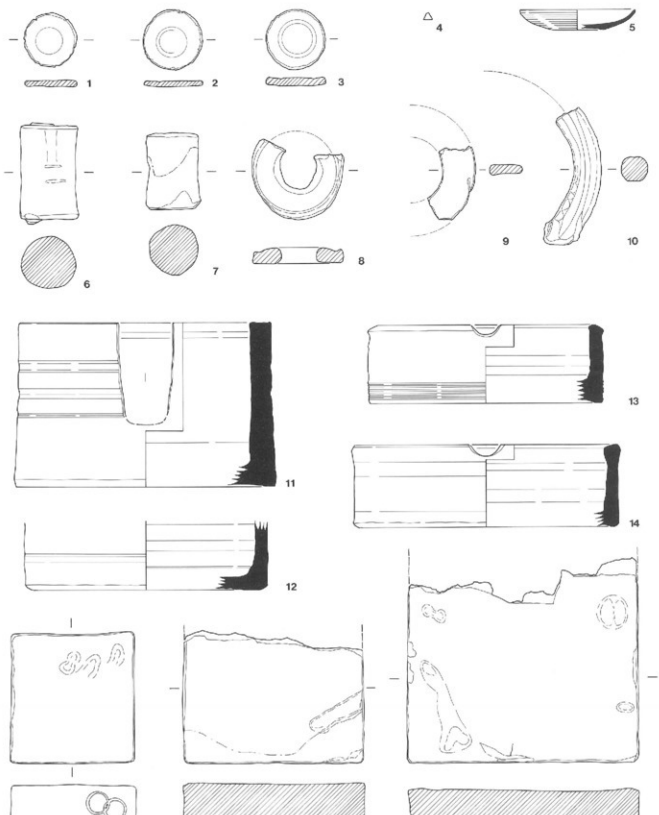


fig. 507　出土遺物実測図

のトレンチでは確認できなかった。この暗茶褐色粗砂を除去するとⅠ～Ⅵ区同様の遺構面となる。この面では、ピット６個を検出した。

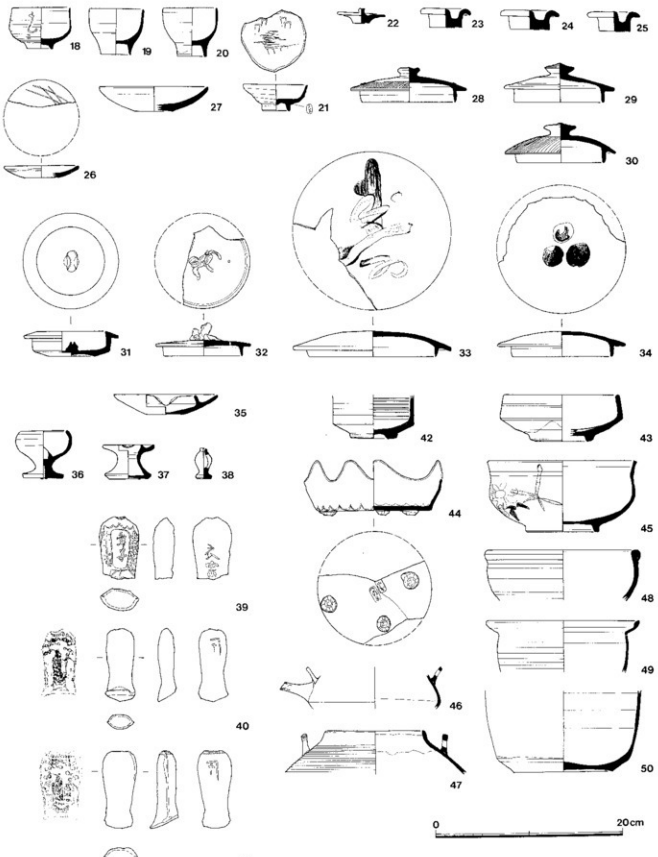


fig. 508　出土遺物実測図

SK01　調査区のほぼ中央、他の遺構面より一層上層の暗茶褐色粗砂上面で検出されたが、東半部分は調査区外であったため、確認できなかった。直径約2.20ｍ、深さ10㎝程度の円形と考えられるが、土坑の西側部分は深さ40㎝と深くなっており、黒色粗砂が埋土を形成していた。土坑の時期は出土遺物が未整理のため不明であるが、おそらく他の遺構と大差ない時期と考えられ、この面を形成する土が比較的短時間に堆積した可能性もある。

SK02　SK01の南側に、SK01と同一遺構面で検出された。土坑は、長径90㎝、短径60㎝で、深さは15㎝程度の南北に長い楕円形である。埋土上面で飯蛸壺が多量に出土した。おそらく意識的に投棄したものと考えられるが、詳しい性格は不明である。蛸壺に混じって出土した須恵器片から、この土坑の埋没した時期は10世紀ごろと考えられる。

Ⅳ　区　土坑１基と、ピット11個を検出した。

SK03　長辺1.5ｍ、短辺1.1ｍの不整方形の土坑である。深さは10㎝と浅い。出土した土器片は中世のものと考えられる。

Ⅴ　区　ピット５個を検出した。いずれも直径20㎝程度で、深さは20～30㎝程度である。

Ⅵ　区　このトレンチでは、遺構は確認できなかった。

出土遺物　今回の調査では、舞子焼が28ℓコンテナに約10箱、中世の土器が同コンテナに約５箱出土した。特に中世の蛸壺、土錘などの漁労具の出土が多く、特徴的である。また、少量ではあるが、緑釉陶磁片や、青磁、白磁などの輸入陶磁片や瓦片も出土している。

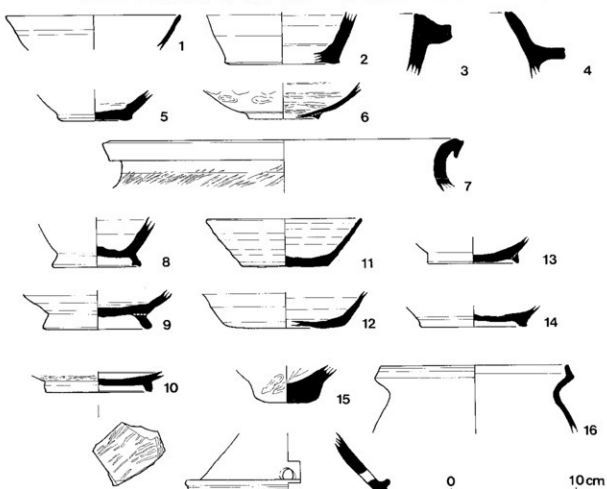


fig.509　出土遺物実測図（４：Ｐ－８　その他：包含層）

3．まとめ

今回の調査では、舞子窯の窯体など、具体的な近世・近代の遺構を検出することはできなかった。しかし、過去に調査例の乏しかった舞子焼の良好な資料を多数得ることができた。またこれまで当該地区には、舞子窯以外の遺跡の存在は知られておらず、今回舞子窯の下層で中世遺構面とその包含層を確認できたことは、今後この地域の調査を行うにあたっての有効な資料となるであろう。上述のように、舞子窯の下層に存在する遺跡は、古代末から中世初頭の集落址と考えられるが、調査範囲が限定されていたことなどもあって掘立柱建物などの明確な遺構を確認することができなかった。しかし遺構の密度、出土遺物の量などからみて、おそらく今回の調査地から遠くない位置に、中世遺跡の中心地が存在する可能性が高い。また、漁労関係の遺物が多く出土しているが、これは調査地から南へわずか100 m程度の距離に瀬戸内海がひろがるという、遺跡の地理的環境ともあわせて、集落の性格を示唆するものである。

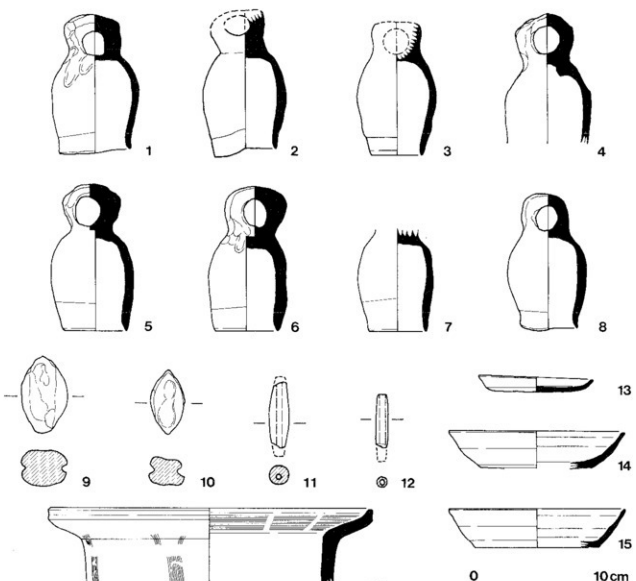


fig. 510　出土遺物実測図（1：SK01　2～5・14・15：SK02　6・7：SK03　8：P31　9～12：包含層　13：SX01　16：P27）

16. 栃木遺跡

1．はじめに　栃木遺跡は、明石川の支流櫨谷川中流域左岸の河岸段丘上にひろがる集落遺跡である。遺跡は昭和60年度～平成元年度の栃木地区の土地改良事業および西神南ニュータウン開発事業に伴う発掘調査で中世の遺構を検出し、弥生時代中期後半・古墳時代後期・中世の遺物が出土した。以後、土地改良事業に伴う試掘調査が実施された結果、遺跡の範囲は、櫨谷川左岸の長さ1,500 m、幅100 mの規模を有する遺跡であることが判明した。

今回の発掘調査は、前年度に県道小部・明石線道路改良事業予定地で実施した発掘調査において調査が完了しなかった第Ⅱ調査区東部と第Ⅲ調査区南部の中世～弥生時代の遺構面について調査を実施した。平成6年度実施した調査では、弥生時代中期～古墳時代後期の竪穴住居が多数確認され、中世～近世の井戸・土坑・河道などが発見され、付近に集落が存在することが確認できた。

2．調査の概要　前年度の調査では、第Ⅱ調査区の西辺圃場水路敷設部分と第Ⅰ調査区SB304西側周辺についてのみ調査を実施した。今回は前年度調査実施部分を除く東側について調査を実施した。なお、調査区は北部をB区、南部をC区とした。

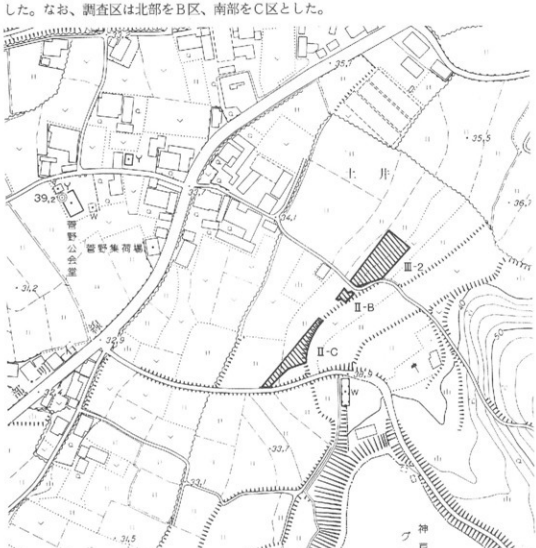


fig. 511
調査地位置図
1：2,500

第Ⅱ調査区－B　本調査区は、近世以降攪乱・削平をうけ、遺物包含層は検出されず、現耕土直下で遺構面を検出した。したがって、弥生時代～中世の遺構を同一面で検出した。

検出した遺構は、柱穴23か所、溝3条である。柱穴群は、調査範囲が狭小なため、建物としてはまとまらなかった。各溝の概要は表1のとおりである。

遺構名	規　模	断面形	検出状況	時期・出土遺物
SD301	幅1.0 m 深さ30cm	断面U字形	調査区西隅で検出 Ⅱ－A区SD304に連続	弥生時代後期末葉 弥生土器高坏
SD302	幅0.3～0.4 m 深さ10cm前後	断面U字形	合流してⅡ－A区SD304に連続	古墳時代後期？ 出土遺物なし
SD303	幅0.6～1.2 m 深さ10cm前後	断面U字形	浅く、埋め土は砂で一部で礫が堆積	

表1　第Ⅱ調査区－B検出　溝一覧

fig. 512　第Ⅱ調査区－B全景

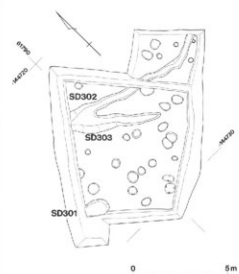


fig. 513　第Ⅱ調査区－B遺構平面図

第Ⅱ調査区－C中近世遺構面　中近世遺構面は、近現代の水田耕土を除去して検出した。検出した遺構は、河道2条、溝1条、その他耕作溝・杭列である。

河道1　第Ⅰ区・第Ⅱ区－Aで検出した河道1に続く河道である。近世段階に弥生・古墳時代の遺物包含層を押し流して形成された河道で、幅2.5 m、深さ1.5 mを計測する。

河道2　第Ⅱ区－Aの南端で検出した河道に続く河道である。耕土直下から削り込まれて分厚く砂礫層が堆積している。河道の規模は幅5.5 m、深さ3 m以上を計測する。

SD201　調査区中央北よりで検出した幅40cm前後、深さ20cm前後の溝である。断面形はU字状である。溝の南端は耕作溝で削られる。

耕作溝・杭列　耕作溝と杭列は、現代の水田の形状と同一方向に弧を描くように、平行して検出された近世以降の耕作痕と考えられる。

弥生～古墳時代の遺構面　弥生～古墳時代の遺構面は、調査区の北東部では、中近世の遺構と同一面であり、古墳時代の溝1条を検出した。しかし、河道1より南部では、上層の中近世の基盤層である暗黄褐色砂質土を除去した結果、暗褐色砂質土の遺物包含層が認められた。この包含層直下

で弥生時代中期～後期の竪穴住居４棟と古墳時代の竪穴住居１棟、土坑１基、溝３条、不明遺構２か所を検出した。

主要遺構の概要は表２～４のとおりである。

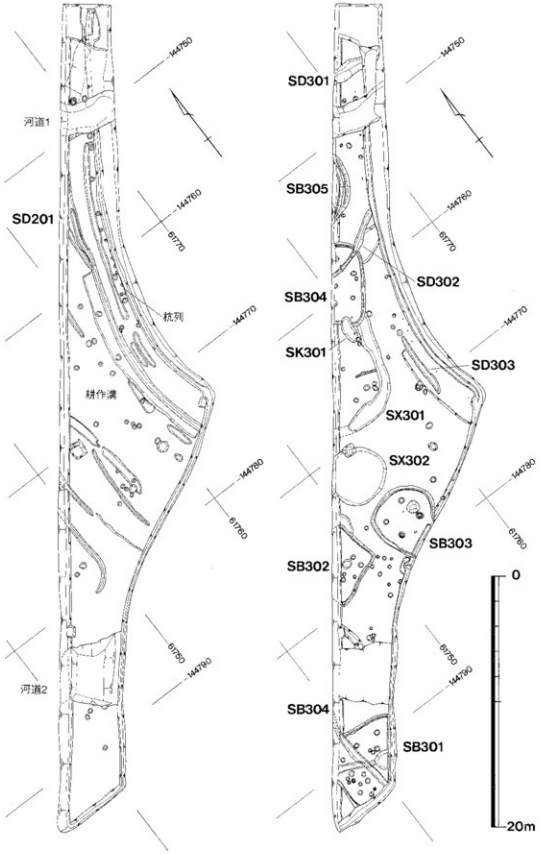


fig. 514
第Ⅱ調査区－C
遺構平面図
（左：古墳時代
後期以降
右：弥生時代後期
～古墳時代前期）

竪穴住居

遺構名	形状	規模	検出状況	時期・出土遺物
SB301	隅円方形	一辺7.0m前後 壁体15cm前後残す	中央東よりに炉坑検出、炉坑から西へ排水溝つく。Ⅳ区SB301の続き	弥生時代後期
SB302	台形	東西5.5m，南北4.5m 壁体12cm	中央東よりに炉坑検出、支柱は不明	古墳時代前期
SB303	円形	径5.4m 壁体40cm前後残す	中央東よりに炉坑検出、支柱は4か所検出、床面より壺片出土	弥生時代中期
SB304	隅円方形	東西2.4m以上 南北6.5m，壁体25cm	住居址北部でSD302に切られる 支柱は2か所検出	弥生時代後期
SB305	隅円方形	推定一辺5.7m前後 壁体50cm	Ⅱ区－AのSB305の続き	弥生時代後期

表2　第Ⅱ調査区－C検出　竪穴住居一覧

溝

遺構名	規模	断面形	検出状況	時期・出土遺物
SD301	幅1.2m前後 深さ40cm	断面V字形	Ⅱ区－A・Ⅰ区SD301の継続部分	弥生時代後期末葉～古墳時代前期
SD302	幅0.3～0.5m 深さ10～30cm	断面U字形	Ⅱ区－A・Ⅰ区SD302の継続SB304を横切る	古墳時代前期？ 出土遺物高坏等
SD303	幅0.3～0.6m 深さ10cm前後	断面U字形	弧状の耕作溝	中世
SD304	幅0.6m前後 深さ30cm前後	断面U字形	SB301を横切る	古墳時代前期？

表3　第Ⅱ調査区－C検出　溝一覧

土坑・性格不明遺構

遺構名	形状	規模	断面形	検出状況	時期
SK301	長楕円形	長径2.2m，短径1.0m 深さ20cm前後残す	逆台形	SB304を切り、埋め土内から中世土器出土	中世
SX301	溝状遺構	幅0.8～1.2m 深さ15～30cm	U字形	Ⅱ－A SX301に続くものかSB304の床を切る	弥生時代中期？
SX302	円形	径4.5m 深さ20cm前後残す	皿状 落ち込み	ゆるやかな落ち込み、埋め土は砂礫土、出土遺物なし	不明

表4　第Ⅱ調査区－C検出　土坑他一覧

fig. 515　第Ⅱ調査区－C全景（弥生時代）

fig. 516　第Ⅱ調査区－C中央部遺構

fig. 517　SB304

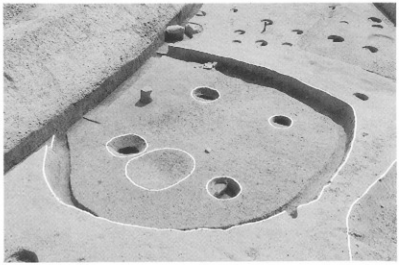


fig. 518　SB303

第Ⅲ調査区－2

第Ⅲ調査区は、生活用道路をはさんで第Ⅰ・第Ⅱ調査区の北隣の水田に設定した。前年度、排出土置き場の確保のため、中央で南北2区に分割して調査を実施した。北側を第Ⅲ区－1、南側を第Ⅲ区－2とした。今回の調査は、前年度未調査に終わった第Ⅲ区－2の圃場水路敷設部分東側の中世～弥生時代の遺構面について調査を実施した。調査は中近世の水田耕土ないしは整地土である暗黄褐色粘性砂質土を除去して、中世～弥生時代の遺構面である黄色粘質土面を検出して調査を実施した。弥生時代の遺構は、調査区の中央より南部で検出され、調査区北部では削平されていて、検出されなかった。

中世の遺構

中世の遺構は、調査区東部の一段高い部分で掘立柱建物3棟、中央部を東西に区画する溝が重複して4条、溝の南に掘立柱建物3棟が検出されたほか、土坑7か所や建物にまとまらないものの、柱根を残す柱穴を含めて370か所の柱掘形を検出した。

掘立柱建物（南群）

調査区南部で検出したSB201・202・205は、ほぼ同一方位を採り、柱間寸法も同一規格で営造された一連の建物と考えられる。また、SB201とSB202は南東部の柱掘形の切り合い関係からSB201の営まれた後、SB202が営まれたと考えられる。さらに、SB201とSB205は建物間の間隔が1.5mで、間に雨落ち溝と考えられるSD206が穿たれている点から、同一時期に営まれた建物である可能性がある。

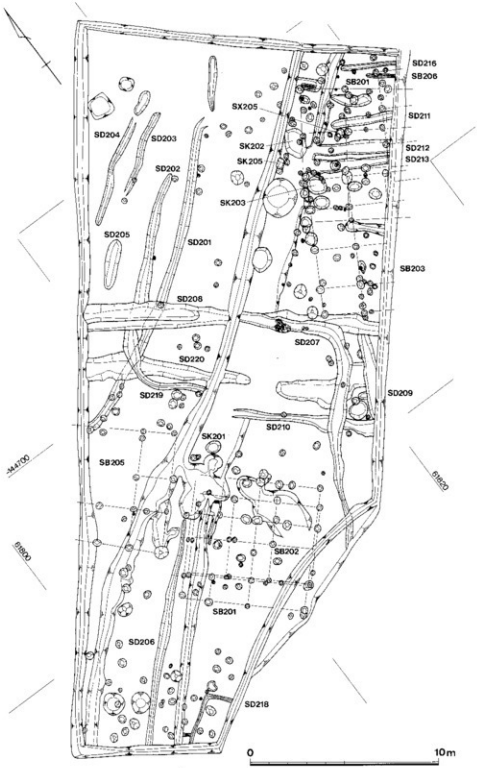


fig. 519
第Ⅲ調査区－2
中世遺構面平面図

掘立柱建物（東群）

調査区東部で検出したSB203・204は、ほぼ同一方位をとるものの柱間寸法の規格は不統一である。重複して検出したSB203・204は柱掘形の切り合い関係から、SB204が営造された後にSB203が営まれたと考えられる。SB206は方位・柱間寸法の規格ともSB201～205と異なり、時期を違えて、東側の調査区外にある集落の建物である可能性がある。

掘立柱建物の概要は表5のとおりである。

遺構名	規　　模	柱　間　寸　法	方　向
SB201	東西 6.6 m，南北 6.6 m （4 間）　（4 間）	東西 2.1 × 1.5 × 1.5 × 1.5（北から） 南北 1.5 × 1.5 × 2.1 × 1.5（東から）	北45° 東
SB202	東西 6.3 m，南北 4.3 m （3 間）　（2 間）	東西 2.1 等間 南北 2.3 × 2.0（北から）	北48° 東
SB203	東西 4.4 m以上，南北 7.5 m （2 間以上）　（4 間）	東西 2.2 等間 南北 1.8 × 2.1 × 2.1 × 1.5（北から）	北39° 東
SB204	東西 4.2 m以上，南北 6.6 m （2 間以上）　（3 間）	東西 1.8 × 2.4（東から） 南北 2.4 × 1.8 × 2.4（北から）	北36° 東
SB205	東西 3.9 m以上，南北 6.6 m （2 間以上）　（4 間）	東西 1.8 × 2.1（東から） 南北 2.1 × 1.5 × 2.1（北から）	北45° 東
SB206	東西不明，南北 6.0 m以上 （不明）　（2 間以上）	東西不明 南北 2.0 等間	北30° 東

表 5　第Ⅲ調査区－ 2 検出　掘立柱建物一覧

fig. 520　第Ⅲ調査区－ 2 全景

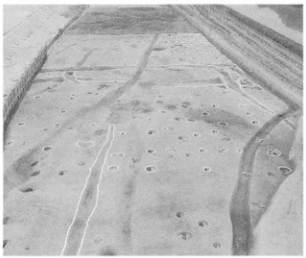


fig. 521　SB201・SD208

fig. 522　SB201

fig. 523　SD208（集落区画溝）

溝

溝は大別して、調査区北部で検出されたSD201～205などの耕作溝と建物に付属する溝と考えられるSD206・211・212・213、集落の区域を画するのに穿たれた溝SD207～210、SD219・220がある。その他、性格不明のSD214・216～218がある。

SD201～205

いずれも幅25～50cm、深さ7～20cm前後の浅い、断面U字形の溝である。溝は全て灰色砂質土が被覆している。溝の大半は削平され、とぎれとぎれに検出されている。溝の方向から、SD201・203・205が同時期に、またSD202・204が同じ時期に穿たれたものと考えられる。そして、SD201・202は、集落の区画溝であるSD208の埋没後に穿たれており、集落の廃絶後には当地が耕作地として利用されたことをうかがわせる。

SD206

調査区南部のSB201とSB205の建物の間に、建物方向と平行して穿たれた溝である。幅20～60cm、深さ15cm前後の断面V字形の溝で、溝内から須恵器や土師器皿が出土している。SB201ないしはSB205の雨落ち溝と考えられる。

SD211～213・216

いずれもSB203とSB204周辺に同一方向に穿たれる溝である。これらの溝は、幅15～50cm、深さ15cm前後の断面U字形である。建物方位と同一方向を採り、所属建物は不明であるが何らかの建物に関連する溝の可能性がある。

集落区画溝

SD208は、南東から北西に横断する溝で、ある時期に南西から北東方向に新たに溝（SD207）を穿って、鉤形状に巡る溝に造り変えられている。当初の溝SD208は幅0.5～1.4m、深さ15～30cmの規模である。後に付け加えられた溝SD207は、幅40～50cm、深さ12～30cmを計測する。

SD220

SD208に平行し、幅0.5～1.5m、深さ10～25cm前後でSD207・SD219に切られる。

SD209

SD208に流れ込む溝で、幅70cm、深さ24cm前後の断面U字形の溝である。

SD210・219

SD208に平行し、調査区西部で鉤形に曲折して、SD208に合流する。溝の規模は、幅0.3～2.0m、深さ15cm前後を計測する。

以上の各溝は、SD208を中心にして、何度かの掘り替えの結果、非常に錯綜した状況で検出された。今後、出土遺物の整理作業のなかで、遺構間の前後関係を検討する必要がある。

その他の溝

調査区南端で検出したSD218は、幅20cm、深さ10cm前後で鉤形に屈折して巡る溝である。埋め土内からは、土師器片・須恵器片が少量出土した。検出状況および古墳時代後期の竪穴住居が集中して検出された第Ⅰ調査区北部に近接した位置にある点から、古墳時代竪穴住居の周壁溝の残痕の可能性がある。

性格不明遺構

性格の明らかでない遺構は、5か所で検出した。そのうちのSX205は、掘立柱建物SB204の中央北よりに穿たれた形状不定形な土坑状の落ち込みである。長径65cm、短径45cm、深さ10cm前後を計測する。掘形内には、底部と口頸部を欠く土師器甕を埋め、口頸部を割り欠いたあとを須恵器の塊で塞いでいる。この落ち込みの東に接するSB204の東柱の掘形内には、土師器鍋の完形品が埋められていた。このようなSX205の検出状況から、SB204の営造前後に何らかの地鎮祭祀が行われた痕跡とみることもできる。

その他の性格の明らかでない遺構は、概ね集落の宅地造成に伴う整地の際の埋め土部分を落ち込みとして遺構検出したものと考えられる。特に、SX201はSD208とSB201の間

の窪地状の落ち込みで、須恵器鉢片が多量に埋め土内から出土した。また、SX204 もSX 201と同様な自然地形の窪地状の落ち込みであるが、埋め土内から須恵器塊などが出土し、集落地造成時期の上限をしるうえに重要である。

土　坑　　土坑は、掘立柱建物の周辺を中心に、高位の遺構面で7か所検出した。

遺構名	形　状	規　模	断面形	検　出　状　況	出土遺物
SK201	楕円形	長径0.8 m，短径0.6 m 深さ10cm前後残す	舟底状	SB201に接して掘られる	須恵器塊
SK202	楕円形	長径1.6 m，短径1.1 m 深さ15cm前後残す	舟底状	SB204の柱掘形を切る 浅い	土師器皿
SK203	隅丸方形	一辺1.0 m 深さ20cm前後残す	舟底状	SB203の北隅に辺を合わせて掘られている	須恵器塊・鉢 土師器　坏
SK204	楕円形	長径1.4 m，短径1.2 m 深さ20cm前後残す	舟底状	西側を現代の農業用水路にけずられる	
SK205	長方形	東西0.4 m，南北0.6 m 深さ8 cm前後残す	箱　型	SB204の西側で検出	青磁碗片
SK206	楕円形	長径1.2 m，短径1.0 m 深さ20cm前後残す	舟底状		土師器片 須恵器片
SK207	楕円形	長径1.6 m，短径1.0 m 以上、深さ15cm	舟底状		土師器片 須恵器片

表6　　第Ⅲ調査区－2検出　土坑一覧

弥生時代の遺構　　弥生時代の遺構は中世の掘立柱建物の検出された遺構面と同一面で検出された。遺構は調査区の南西部のみに広がりをみせていた。検出された遺構は溝3条と土坑3基、性格不明の落ち込み2か所である。

fig. 524　SD301・302

fig. 525　第Ⅲ調査区－2弥生時代遺構面平面図

溝　　溝はすべて南東から北西に流れ、埋め土内に弥生時代後期末葉の土器を含んでいた。

遺構名	規　模	断面形	検出状況	時期・出土遺物
SD301	幅1.1～1.2m 深さ25～35cm	断面U字形	やや南に屈曲しながらSD302を切っている	弥生時代後期末葉
SD302	幅1.2～1.4m 深さ25cm前後	逆台形に掘り 北側でU字形	SD301に埋没後切られる	弥生時代後期末葉
SD303	幅1.8～2.4m 深さ35cm前後	断面逆台形	SK302・SX301に切られる	弥生時代後期末葉

表7　第Ⅲ調査区－2検出　弥生時代溝一覧

土　坑

遺構名	形　状	規　模	断面形	検出状況	時　期
SK301	楕円形	長径0.7m，短径0.6m 深さ35cm前後残す	U字形	SK303の北に接し東側を攪乱される	弥生時代後期末葉
SK302	不定形	南北1.4m，東西1.1m 深さ15cm	U字形	SD303の東肩を切る	弥生時代後期末葉
SK303	方　形	南北3.0m，東西2.6m 深さ30cm	舟底状 底平坦	調査区の南西端に位置し、調査区外の生活用道路の下に続く	弥生時代後期末葉

表8　第Ⅲ調査区－2検出　弥生時代土坑一覧

その他不明遺構

遺構名	形　状	規　模	断面形	検出状況	時　期
SX301	長楕円形	長径2.4m，短径0.9m 深さ12cm前後残す	皿　状	SD303とSX302を切る	弥生時代後期末葉
SX302	不定形	南北3.0m，東西2.2m 深さ20cm	皿　状	南東からゆるやかに落ち込むSD302に切られる	弥生時代後期末葉

表9　栃木遺跡第Ⅲ地区－2検出　弥生時代不明遺構一覧

3．まとめ

前年度の調査では、井戸状遺構などの集落の縁辺に存在する付属施設が発見されたが、今回の調査では、中世村落が調査区の東部を中心に存在し、重複状況から溝で区画された2時期の建物が営造されたことが明らかになった。今後圃場整備等に伴う調査で今回の調査区の東側の集落中心部の構造が明らかになると思われる。

また、弥生時代～古墳時代の集落は、南西部で残存状況が良好で、北東部では一部で残存するものの、ほとんどが浅く、明瞭でない。

遺跡の時期については、遺物の整理・検討ができていないため、明確でないが、弥生時代中期～古墳時代前期、鎌倉時代～室町時代の檜谷地区での中心的集落であった可能性がある。

17. 西神（せいしん）ニュータウン内第62地点遺跡　第５次調査

１．はじめに

昔野地区土地改良整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査は、平成４・５年度に実施され、事業地内における埋蔵文化財の有無の確認作業が行われてきた。

今回の調査は、これらの試掘調査の結果埋蔵文化財が確認された地区のうち、工事によって影響をうける地区の一部について実施した。

また、調査の進行に伴い、当初調査予定地（D・E区）の隣接地（事業地内）にも埋蔵文化財の存在の拡がりが確実となったため、改めて２か所の試掘坑を設定して調査を実施した。その結果、１か所の試掘坑において平安時代頃の遺物包含層や弥生時代～古墳時代の土器を多く含む遺構埋土（耕土下約１ｍ）と考えられる土層を確認した。この結果をうけて土地改良区と協議した結果、調査範囲を拡大して調査を進めることとなった（F・G区）。

２．調査の概要

今回の調査地は、切り土部分（E・F区）と水路部分（D・G区）とからなる。検出した遺構は竪穴住居10棟、掘立柱建物２棟、溝２条、ピット多数などで、様々な時期のものがあるが、黄灰白色上面を基盤層とする同一面で検出している。遺構面は緩やかな傾斜面であり、北部が高く南部が低い位置で検出した。以下主な遺構について述べる。

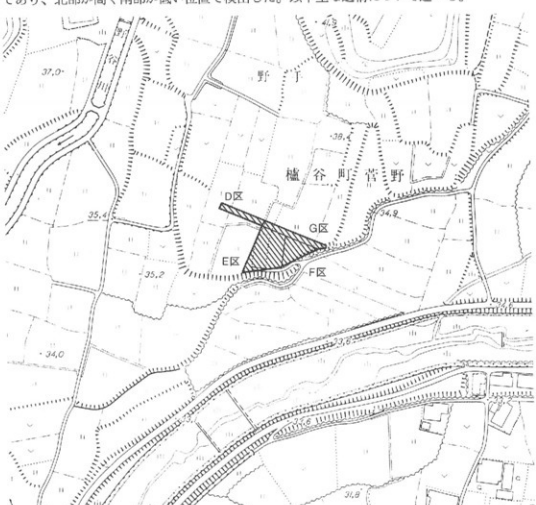


fig. 526
調査地位置図
1：2,500

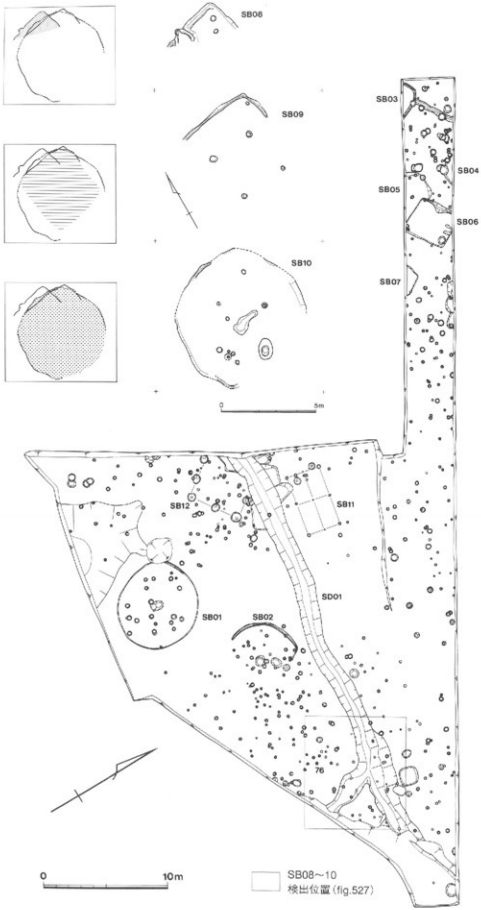


fig. 527
SB08～10 平面図

fig. 528
遺構平面図

SB01　E区南部で検出した平面形がやや歪な円形を呈する竪穴住居である。長径6.8 m、短径6.2 m、残存高5～15cmを測る。後世の削平が顕著で、残存状態は非常に悪いが、出土遺物から、弥生時代後期後半のものと考えられる。幅17cm、深さ22cmの周壁溝を西部のみで検出した。主柱穴の特定ついては、内部で20基弱のピットを検出しており、今後の整理作業を待って検討したい。

SB02　E区中央部で検出した竪穴住居であるが、非常に残存状態が悪く、半月形に回る周壁溝（幅14～23cm、深さ17cm）により辛うじて竪穴住居と確認できたもので、検出面から床面までの深さは約5 cmしか残存していない。東部の周壁溝および肩部は削平のため検出されなかった。内部で多数のピットを検出しており、主柱穴の特定ついては、今後の整理作業を待って検討したい。出土遺物から、弥生時代後期のものと考えられる。

SB03　D区西端で検出した竪穴住居で、南側は調査区外にのびるため平面形等については不明である。周壁溝（幅21cm、深さ8 cm）のみ確認している。6世紀代の遺物が出土した。

SB04　D区西部で検出した竪穴住居で、北側は調査区外にのびるため平面形等については不明である。6世紀代の遺物が出土している。

SB05　D区西部で検出した竪穴住居で、南側は調査区外にのびるが、平面形はやや歪な隅円長方形を呈すると考えられる。東部の一部をSB06によって切られている。床面までの深さ13cmを測る。埋土中より6世紀中葉の土器とともに滑石製紡錘車1点が出土している。

SB06　D区西部で検出した竪穴住居で、北西隅および南東隅が調査区外にのびるが、平面形は3.5 × 3.1 mの方形を呈する。北東辺の壁際に造り付けの竈をもち、北西辺の壁際にのみ膨らみをもった周壁溝が存在する。床面までの深さ13cmを測る。出土遺物から6世紀末のものと考えられる。

SB07　D区中央部で検出した竪穴住居で、南側は調査区外にのびるため平面形等については不明である。床面までの深さ3 cmを測る。

SB08　F・G区西部で検出した竪穴住居で、北西辺の壁際に造り付けの竈をもつ。SD01によって切られている。北西辺と北東辺の一部は確認しているが、南部については明確ではない。北部は残存高約40cmを測る。出土遺物から、6世紀末頃のものと考えられる。

SB09　F・G区西部で検出した竪穴住居で、SB08・SD01によって切られている。北西辺と北東辺の一部は確認しているが、南部については明確ではない。平面形態については、SB10と重なり合う位置で検出したピットの出土遺物などの検討により今後明らかにしたい。北部は残存高約40cmを測る。古墳時代のものと考えられる。

SB10　F区北東部で検出した竪穴住居で、SB08・09・SD01によって切られている。平面形は

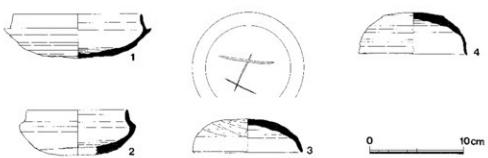


fig. 529
SB05・06出土遺物実測図
（1・2：SB05
3・4：SB06）

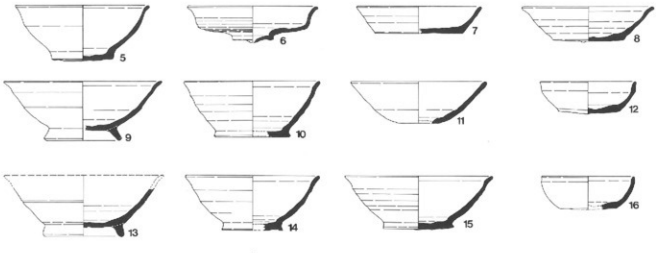


fig. 530　SD01 出土遺物実測図（5～16：須恵器）

fig. 531　SP76 遺物出土状況

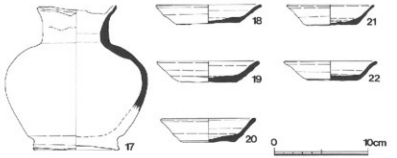


fig. 532　SP76 出土遺物実測図（17：須恵器　18～22：土師器）

円形を呈し、弥生時代後期のものと考えられる。SB10 の内部でピットを10基程度検出しているが、このなかに SB08・09 の柱穴が含まれている可能性が考えられ、詳細については今後の整理作業を待って検討したい。

SB11　E区北西部で検出した２×２間の掘立柱建物である。

SB12　E区西部で検出した２×２間以上の掘立柱建物である。柱穴は径70～80cmの掘形をもち、内部に径20cmの柱痕が残る。出土遺物から、６世紀末～７世紀初頭のものと考えられる。

SD01　E区中央部からG区東部にかけて調査区内を東西に横切る形で検出した幅 1.3 ～２m、深さ84cmを測る溝で、10世紀後半と考えられる須恵器・土師器や瓦などのほか、窯体片や焼成時に他の土器の一部が融着した須恵器片が出土しており、周辺に窯跡が存在する可能性を示す遺物として注目される。

SP76　F区で検出したピットで、底付近に土師器皿５枚を正位に置き、その上部に口縁部を打ち欠いた須恵器の壺を倒位にやや傾けて埋納している。地鎮のためのものと考えられる。11世紀代のものと考えられる。

落ち込み　E区 SB01 の西側で検出した落ち込み内より、弥生時代中期後半の土器が比較的まとまって出土している。

3．まとめ

弥生時代の竪穴住居や古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物、平安時代の溝・柱穴など密集して遺構が検出されており、時代を超えて調査区一帯が居住域に利用されていることが判明した。今後周辺地の調査によりさらに詳細な状況が明らかになると考えられる。

18. 西神（せいしん）ニュータウン内第62地点遺跡　第６次調査

１．はじめに

西神ニュータウン内第62地点遺跡は、明石川支流の櫨谷川右岸に位置する。昭和56年度の第１次調査以来、５度の発掘調査が行われ、弥生時代中期・古墳時代後期・奈良時代・平安時代・中世の遺構・遺物が確認されている。

第６次調査にあたる今回の調査は、菅野栃木線道路改良工事に伴うもので、道路敷き部分と切土部分について実施した。調査区は、便宜上地形をもとにⅠからⅤまで分割した。発掘調査は工事の進捗状況に応じてⅣ区から開始し、埋め戻し後、Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ区を行った。

２．調査の概要

調査方法は、盛土から包含層直上までを重機で掘削し、以下の包含層掘削・遺構検出・遺構掘削・精査を人力で行った。そして、調査終了後、重機により埋め戻しをした。

Ⅰ　区

谷地形の北東斜面に当たる。近世以降の田圃拡張による盛土が著しく、耕土下約1.5ｍで遺物包含層となる。下層の灰色土より、須恵器・土師器・瓦が出土した。

Ⅱ　区

北半は、谷地形である。下層より弥生時代中期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代後半、中世と、各時代の遺物を主体とする遺物包含層が存在する。南半は、田圃整形により大きく削平されており、耕土直下で地山を検出した。遺構は存在しない。

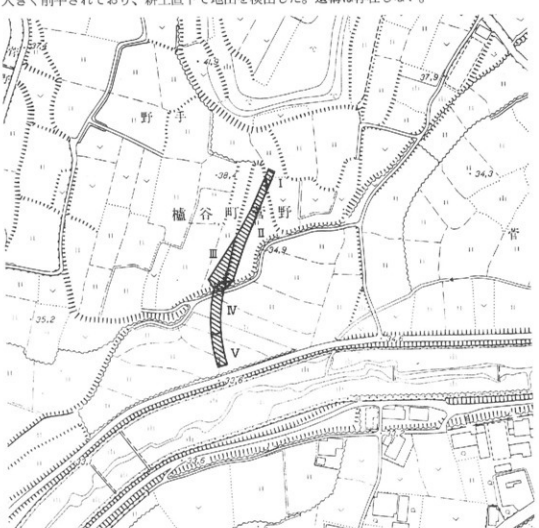


fig. 533
調査地位置図
1：2,500

fig. 535　II区

fig. 536　II区谷地形遺物出土状況

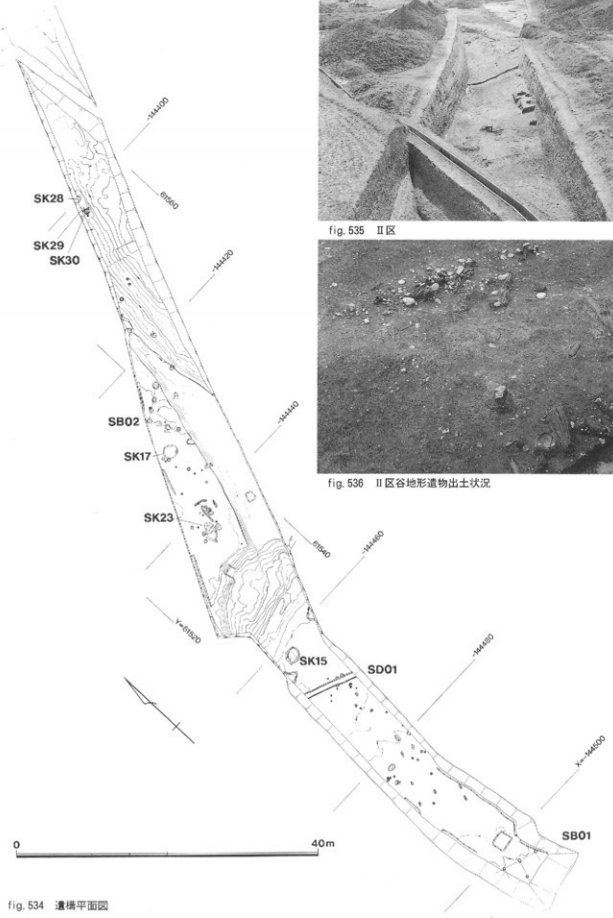


fig. 534　遺構平面図

谷地形　Ⅰ区とⅡ区北半で検出した。東肩は調査区内では検出できなかった。幅40ｍ以上であると考えられる。基本層序は、耕土・床土、褐色砂礫、灰色シルト、灰色粘土・茶褐色粘性砂質土、暗灰色粘土、灰色砂礫、灰色シルト、黒色粘土・灰黒色粘質土、淡灰色シルトである。淡灰色シルト層以下では、遺物は確認できなかった。

耕土・床土下、砂礫層の盛土が約40㎝ほど堆積し、その下に灰色シルトが約50㎝堆積する。この土層以下、黒色粘土までの間で、弥生土器・須恵器・土師器などの遺物が多量に出土した。

茶褐色粘性砂質土は、西斜面側に堆積し、ある時期の肩を形成している。

黒色粘土上面の灰色砂礫・灰色シルト層中で、板・杭・角材状のものなどの木製品を検出した。古墳時代後期の須恵器・土師器が出土している。

黒色粘土および礫混じり灰黒色粘質土からは、弥生時代中期の土器が、西側に比較的かたまって出土している。

SK27　Ⅱ区谷部分の埋土中層、灰色砂礫土上面で検出した。直径120㎝弱の歪な円形である。深さ約15㎝で皿状にくぼむ。炭・灰が28ℓコンテナに2箱分詰まっていた。底面は火を受けた状況ではない。須恵器・土師器の小片が出土している。

SK28　Ⅱ区谷部分の西側斜面で検出した。西半分は調査区外のため不明であるが、直径が約90㎝、深さ48㎝の円形の土坑と思われる。埋土は上層が暗灰色小砂礫土、下層が暗灰色粘土である。上層埋土中に数㎝から20㎝弱の礫が混入する。SK28からSK30までは、茶褐色粘性砂質土をベースとする。

SK29　Ⅱ区谷部分の西斜面側で検出した。SK30の北側に隣接する。西半分は調査区外のため不明であるが、直径約70㎝、深さ約20㎝の土坑と思われる。

SK30　Ⅱ区谷部分の西斜面側で検出した。長径81㎝、短径67㎝、深さ51㎝である。上層埋土は青灰色礫混じり粘土、下部に底部を打ち欠いた羽釜を掘える。羽釜内埋土は灰色シルトである。埋土上層出土の須恵器塊と羽釜の年代から12世紀後半と思われる。調査時点では、周りの掘削が進んでいたため湧水は確認できなかったが、井戸の底部と思われる。

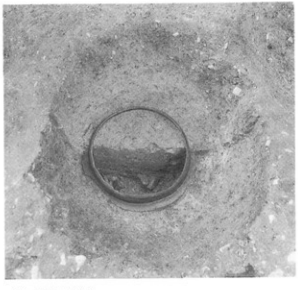


fig. 537　SK30

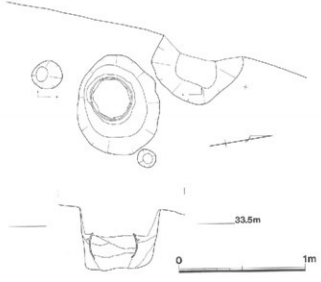


fig. 538　SK30 平面・断面図

fig. 539　Ⅲ区

fig. 540　Ⅳ区

Ⅲ　区　　第５次調査地点と同じ段丘上に位置する。耕土下わずかで遺構面となる。掘立柱建物、土坑などを検出した。遺物包含層からは、須恵器・土師器などが出土している。Ⅱ区南半とⅢ区とでは約１ｍの比高差がある。

SK17　Ⅲ区北半で検出した。長径 206 ㎝、短径 176 ㎝、深さ約15㎝の楕円形の土坑である。淡褐色砂質土を埋土とする。古墳時代後期の須恵器坏・甕、土師器小片が出土した。

SK23　Ⅲ区南半で検出した。長径約 2.5 ｍ、短径約 1.5 ｍ、深さ約40㎝の土坑である。埋土は褐灰色粘性砂質土である。土師器片が出土した。

SB02　Ⅲ区北端で検出した３間×２間以上の掘立柱建物である。柱間は 130 ㎝から 150 ㎝である。方形柱穴掘形の規模は約50×70㎝である。残存状況が悪く、柱痕も確認できなかった。

Ⅳ　区　　弥生時代の土坑、平安時代後半の溝・土坑などを検出した。基本層序は、現圃場整備の盛土、耕土、旧耕土、灰色粘質土（遺物包含層）、褐灰色粘質土（小礫含む）、淡灰色シルト質粘土（地山）である。遺構は褐灰色粘質土上で検出できた。

SK15　Ⅳ区北半で検出した。径 180 ～ 234 ㎝、深さ18㎝の土坑である。甕を主体とする弥生土器が出土した。埋土は、黒灰色粘性シルトである。

SD01　Ⅳ区北半で検出した。幅約90㎝、深さ約12㎝、北西から南東方向へ直線状にのびる溝である。断面は浅い逆台形であり、埋土は、上層が暗灰色粘質土、下層が灰色粘土である。須恵器・土師器の小片が出土した。

Ⅴ　区　　基本層序、遺構検出状況などはⅣ区と同様である。南端で掘立柱建物を１棟検出した。

SB01　Ⅴ区南端で検出した。東西２間以上、南北１間以上の掘立柱建物である。Ｐ３以外は柱痕を確認した。東西の柱間は 230 ～ 245 ㎝、南北の柱間は 240 ㎝である。柱穴掘形の規模は、直径約40㎝、深さ30～65㎝である。

３．まとめ　　今回の調査では、掘立柱建物・土坑・溝・柱穴・谷地形を検出した。Ⅲ区で確認した遺構群のほかに、Ⅳ・Ⅴ区でも掘立柱建物などの遺構を確認できたことは、集落の低地への進出を考えるうえで重要である。

また谷部分からは、弥生時代中期以降、中世に至るまでの土器が多量に出土した。弥生土器・土師器・須恵器のほかにも、鞴壺・円面硯・サヌカイト製石鏃などが出土した。

19. 松本（まつもと）遺跡・菅野（すがの）遺跡

1．はじめに

松本遺跡は明石川の支流である櫨谷川の中流域の東側河岸段丘上に位置し、試掘調査を含めた今までの調査で、弥生時代～近世の遺構・遺物が確認されている。今回の松本遺跡の調査対象地は、土地改良事業に伴う農道および排水路の敷設部分で、弥生時代～近世の遺構・遺物が確認された。

菅野遺跡は松本遺跡の櫨谷川を挟んだ対岸の河岸段丘上に位置し、平成５年度の試掘調査で、弥生時代～中世の複合遺跡であることが確認されている。今回の菅野遺跡の調査対象地は、土地改良事業に伴う用水路および排水路の敷設部分で、弥生時代中期～平安時代後期の遺構、弥生時代前期～近世の遺物が確認された。

2．調査の概要

調査は松本遺跡については、調査区を昨年度調査箇所と区分するため、南地区とし、さらに南Ａ～Ｅ区に細区分して行った。また、菅野遺跡については、１～16区に調査区を区分して調査を進めた。

①松本遺跡

今回の調査では、南Ｂ～Ｅ区で溝状遺構・土坑状遺構・ピット状遺構などが確認されたが、時期が判明したものはほとんどなかった。

基本層序は、南Ｂ、Ｃ区では現代耕土、旧耕土、中世包含層、地山層の順で、地山層の上面が遺構面となる。南Ｄ、Ｅ区では、南Ｂ、Ｃ区とほぼ同様であるが、Ｅ区の西端で中世包含層の下層に弥生時代後期の包含層が存在し、また、南Ｄ区東端部より西側では、中世包含層と地山層との間に砂質状の沖積層が存在し、その上面が遺構面となり、この沖積層からは遺物が確認されなかった。南Ａ区については、他地区と様相が異なり、近世以降の流土状堆積により包含層が削平されて存在せず、地山層上面もその削平による凹凸が著しい。

遺物

大半が中世包含層、弥生時代後期包含層からの出土で、量的には多くないものの、弥生時代後期包含層からは、弥生時代後期の小型仿製鏡が出土している。

小型仿製鏡

弥生時代後期後半のものと考えられる重圏文鏡で、径6.8㎝、厚さ１㎜で、真中の鈕の径が1.45㎝、鈕を含めた厚さが７㎜を測り、外区に櫛歯文、内区に重圏文を施す。

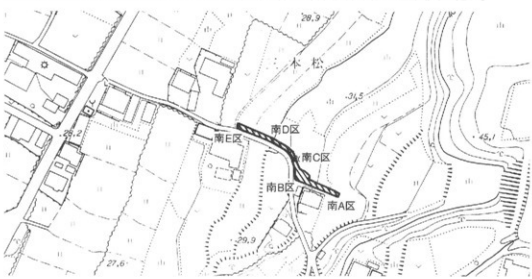


fig. 541
松本遺跡
調査地位置図
1：2,500

fig. 542　松本遺跡南C～E区

fig. 543　松本遺跡出土小型仿製鏡

②菅野遺跡

弥生時代中期後半～中世の遺構、弥生時代前期後半～近世の遺物が確認された。

基本層序は、3・4区を除くほぼ全域で中世の包含層が存在し、1区の西端部から2区にかけて、奈良時代の包含層がその下層に存在する。

遺構は同一面で検出され、奈良時代包含層の上面および2・3区で確認された流路の埋土上面では遺構は検出されなかった。そして、遺構面は河岸段丘を形成する地山面と考えられる。

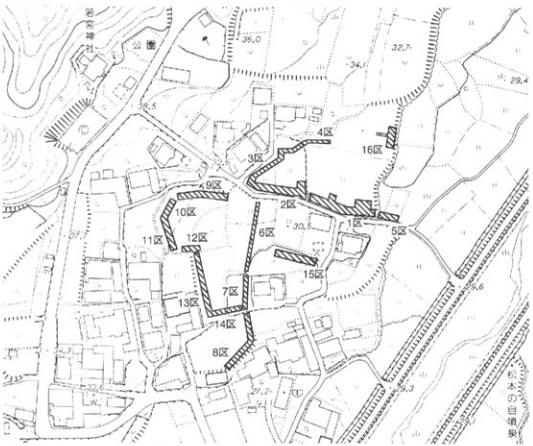


fig. 544
菅野遺跡
調査地位置図
1：2,500

1　区　　今回の調査区の中で、最も遺構の集中する地区である。

主要遺構としては、竪穴住居３棟（SB01～03）、掘立柱建物３棟（SB04～06）のほか、土坑状遺構（SK01）、溝状遺構（SD01～03）や多くのピットなどが存在する。

SB02　平面形が円形の径約10.5ｍを測る弥生時代後期の大型竪穴住居で、南半分は後世の削平により遺存していないため、住居址全体を検出できなかったが、周壁溝と柱穴の一部、中央土坑などが確認された。中央土坑は平面形が不整円形で、断面形が上半分が逆台形、下半分が方形を呈す。主柱穴については不明瞭であるが、６～８本と推定される。

SB03　平面形が方形の一辺約４ｍの古墳時代中期の竪穴住居で、調査区の南側壁際での検出であったため、住居址全体のごく一部分しか確認できなかった。西側と東側の壁際で、幅約１ｍのベッド状遺構が確認された。

SB04　２×２間の古墳時代中期の掘立柱建物で、柱間は約1.6ｍ、柱穴の規模は径約50㎝、深さ約15～30㎝を測る。

SB05　７×２間以上の掘立柱建物で、梁方向の北端１間分は廂と考えられる。柱間は約2.3ｍ、柱穴の規模は径約20～50㎝、深さ約15～40㎝を測る。柱穴からの出土遺物から、11世紀後半～12世紀前半にかけて存在した建物であると考えられる。

SB06　３×１間以上の掘立柱建物で、柱間は約1.7ｍ、柱穴の規模は径約20～50㎝、深さ約15～30㎝を測る。柱穴からの出土遺物から、SB05よりも若干古い建物であると考えられるが、時期は不明確である。

SK01　平面形が長方形の弥生時代後期の土坑状遺構である。長辺約2.4ｍ、短辺約1.9ｍ、深さ約15㎝を測る。

SD01　SB05・06の柱穴を切るようなかたちで検出された溝状遺構で、東西にほぼ一直線にのびているが、西端部分は複雑に分岐している。規模は場所によって異なるが、平均して幅約50㎝、深さ約20㎝を測る。時期は12世紀後半であると考えられる。

fig. 545　１区全景

fig. 546　SB02

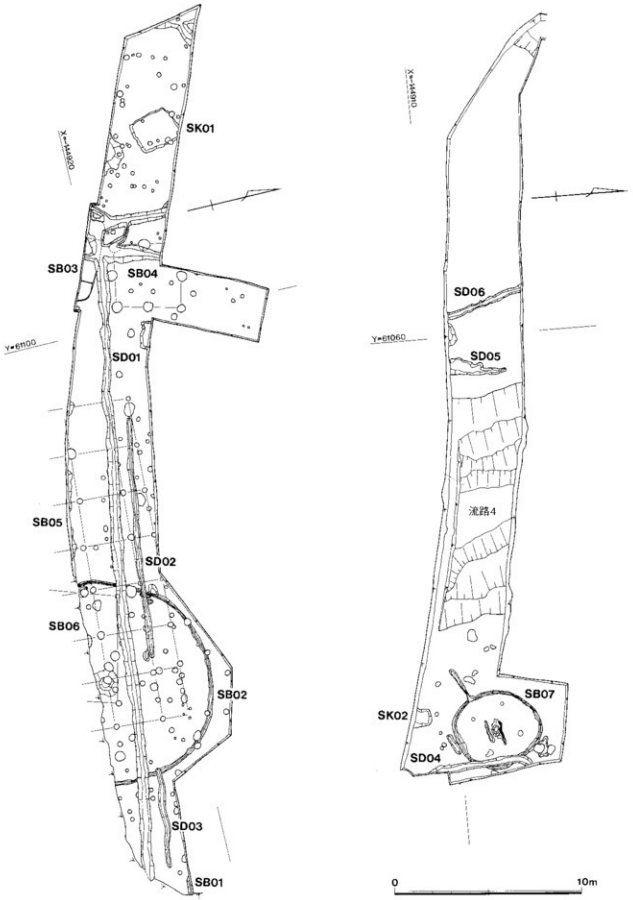


fig. 547　1区・2区遺構平面図（左：1区　右：2区）

fig. 548　2区全景

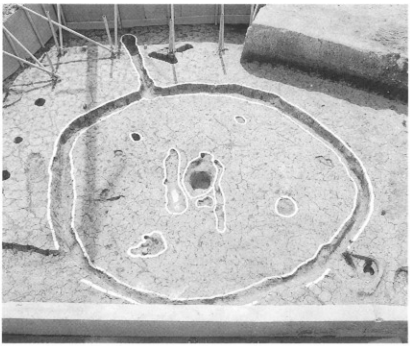


fig. 549　SB07

2　区　　溝状遺構（SD04～06）、土坑状遺構（SK02）などが検出された。

SB07　平面形が円形の長径約4.8ｍ、短径約4.2ｍを測る弥生時代中期の竪穴住居で、建築部材と考えられる炭化材が住居址のほぼ全体にわたって確認されたため、焼失住居である可能性が高い。周壁溝、柱穴、中央土坑などが確認され、住居址の南西端で周壁溝が分岐して約2ｍ程度外側にのびる。周壁溝の規模は幅約20㎝、深さは床面から約10㎝を測る。主柱穴は4本で、径約20～30㎝、深さ約15～50㎝を測る。また、中央土坑は平面形が不整な楕円形で、断面形は逆台形状を呈す。

SD04　幅約40㎝、深さ約10㎝のSB07を切るようなかたちで検出された弥生時代後期の溝状遺構である。

SK02　SB07南側の調査区壁際で検出された弥生時代後期の土坑状遺構で、平面形は長方形状を呈すが、全形は不明である。規模は残存する長辺が約90㎝、短辺約60㎝、深さ約15㎝を測る。

流路4　弥生時代～奈良時代にかけて存在したと考えられる流路で、幅約11.5ｍ、深さは検出面から約1.2ｍを測る。層序については、埋土の状況から大きく上から最上層、上層、中層、下層、最下層に区分することができる。各層位の時期は最上層が奈良時代後期、上・中層が古墳時代中期、下・最下層が弥生時代後期で、最上層で古墳時代後期、下・最下層で弥生時代中期の遺物もかなり多く含まれる。また、最上・上層は湿地状の堆積がみられ、古墳時代中期の段階で流路の大半が埋没し、湿地へと変化していったことがうかがえる。

3・4区　確認された遺構は流路1・2のみである。これらは方向や埋土の状況から合流して、2区の流路4に連続するものと考えられる。

5　区　　遺構は存在せず、河岸段丘面から檜谷川の氾濫原に下がる傾斜面が確認されたのみである。もともとが傾斜地ということで、覆土も流土状堆積を呈し、弥生時代～中世の遺物が出土した。

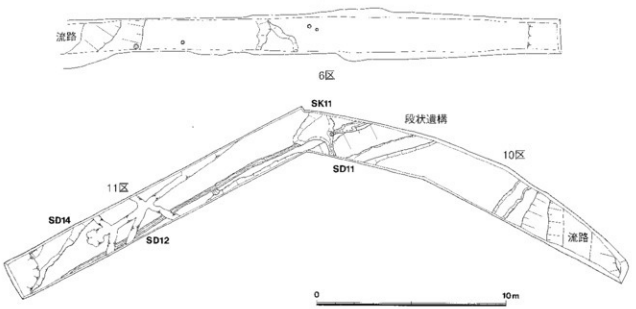


fig. 550　6区・10区・11区遺構平面図

6　区　　北半部で4か所の小規模なピットが確認されたほかは、南半部の古墳時代の流路が検出された程度である。ピットのうち、流路に近い2か所は出土遺物から古墳時代のものと考えられるが、その他は不明である。

7　区　　北端部で検出された落ち込みが、6区で検出された流路の肩部と考えられる。その他、目立った遺構は存在しない。

8　区　　後世の削平が著しいため、遺構の遺存状態は良くなく、目立った遺構は確認できなかった。

9　区　　古墳時代のものと考えられる流路の肩部が検出された程度であるが、この流路は6区で検出されたものに連続する可能性が高い。

10・11区　　10区北端部で9区で検出された流路の対面肩部が検出されたほか、10区南端部から11区にかけて段状遺構、土坑（SK11）、溝状遺構（SD11・12・14）などが検出された。流路以外の遺構は中世のものと考えられ、SK11はその形態やSD11につながる水吐口に杭跡を有することやSD11自体が段状遺構の斜面部分に存在することから、水溜遺構の可能性が高い。

12　区　　時期不詳の段状遺構と落ち込み状遺構が存在する程度である。段状遺構は10・11区で確認されたものに連続するものかどうかは不明である。

13・14区　　溝状遺構と落ち込み状遺構が数か所存在するが、時期をある程度特定できるものはすべて近世の所産であると考えられる。

15　区　　調査区の大半を流路5が占め、その東側で竪穴住居（SB08）をはじめ、数か所のピットが検出された。

流路5　　方向、埋土の状況から2区の流路4と同一の流路と考えられる。埋土についても、流路4と同様に大きく上から最上層、上層、中層、下層、最下層に区分することができる。各層位の時期についても流路4とほぼ同じで、相違点は中層が弥生時代後期に比定された程度である。規模は幅約13.5 m、深さは検出面から約1.5 mを測る。

16 区　　1区の北側約50m付近に位置する調査区で、竪穴住居（SB09・10）のほか、溝状遺構・ピットなどが数か所検出された。

SB09　平面形が方形の長辺約3.4 m、短辺約3.0 mを測る古墳時代前期の比較的小ぶりの竪穴住居で、二重の周壁溝を有し、建て替えが行われたのか、あるいはもともと二重の周壁溝をもつものかは不明である。主柱穴は2本と考えられ、径約30cm、深さ約50cmを測る。また、南東隅に貯蔵穴状の落ち込みを有し、この落ち込みは平面形が楕円形を呈し、長径約75cm、短径約50cm、深さ約10cmを測る。

SB10　平面形が六角形の一辺約4.4 mを測る弥生時代後期の竪穴住居で、東半分は後世の削平により遺存していないため、住居址全体の検出には至らなかった。幅約1 mのベッド状遺構をもち、そのベッド状遺構上に小規模な周壁溝を断片的に有するものの、住居址の角部分には存在しない。主柱穴は2本のみ確認されているが、全体で6本と推定される。住居址内からは土器類とともに炭化材が確認され、焼失住居である可能性も考えられる。これらの遺物に混じってきめの細かい粘土塊が床面に貼りつくようなかたちで確認され、土器製作用のデポの可能性も考えられるが、用途については不明である。

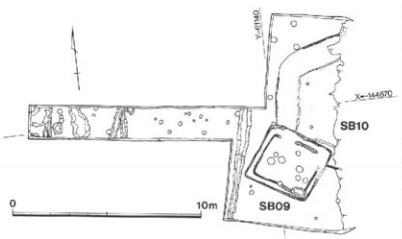


fig. 551　16区遺構平面図

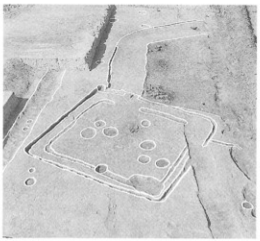


fig. 552　SB09

遺　物　　流路から出土したものが特に多い。その大半が土器類であるが、木製品・木質遺物も数多く確認された。木製品は用途不明の部材がほとんどであるが、鍬や木錘なども含まれる。土器類については、最上層～最下層まで数多く出土しているが、下・最下層の出土密度が高く、弥生時代中期前半～後期のものが確認されており、弥生時代中期後半のものの割合が高い。また、奈良時代後期のものとしては、円面硯や墨書土器なども確認されている。住居址からの出土遺物は全体的に少ないが、その中でも、SB07が量・器種ともに最も多い。SB07からは、炭化材に混じって甕・壺・鉢・器台などが確認された。その他、SB03からは、製塩土器片が多く出土している。

3．まとめ　　今回の調査、特に菅野遺跡の調査については、遺跡の中核部にあたりながら、用水路および排水路の敷設部分での調査ということで、調査区域に制約があり、十分な成果を得られたとは言い難い。しかしながら、住居址等の遺構も数多く確認でき、集落の様相をある程度把握できたことは、今後、菅野遺跡の拡がりや性格を検討・考察する上で重要であると思われる。以下、調査の成果について記す。

(1)松本遺跡の調査で出土した小型仿製重圏文鏡は、兵庫県内でも赤穂郡上郡町に所在する井の端7号墳墓からの出土に次いで2例目で、弥生時代の小型仿製鏡としては、神戸市内でも玉津田中遺跡、青谷遺跡からの出土に次いで3例目で、大変貴重なものである。

(2)過去の菅野遺跡の調査においては、弥生時代の遺物は確認されるものの、遺構は検出されなかった。今回の調査で、竪穴住居3棟（SB02・07・10）をはじめ、多くの遺構が確認され、同地域での弥生時代集落の存在が明らかになった。

(3)1区のSB02は大型の竪穴住居で、径が10mを超える例は神戸市内のみならず兵庫県内でも少なく、菅野遺跡のものも入れて11遺跡17例で、未報告のものも含めてもそれほど多くないと考えられ、特筆すべき点であると言えよう。（別添資料〔付表〕参照）

(4)古墳時代の遺物の中で、SB03などの住居址などから製塩土器片が多く出土したことに注目される。古墳時代中期～後期にかけては、製塩土器が塩を作るためだけでなく、祭祀にも積極的に用いられたと考えられている。今回出土した製塩土器の用途については不明瞭であるが、今後、集落の祭祀を検討する上での一助を担うものと考えられる。

(5)流路4・5から出土した木製品・木質遺物の樹種同定結果から、弥生時代後期および古墳時代中期については、木製品・部材には、主として、針葉樹系の樹種が用いられており、また、自然木は広葉樹系の樹種が多いことが判明しており、当時の生活において、道具や部材に用いる素材をある程度選定していたことがうかがえる。自然木の中で、ハンノキ属ハンノキ節やヤナギ属などの低湿地要素をもつものが比較的多く、当時の同地域の自然環境を知る上で重要である。

(6)奈良時代後期の遺物の中で、緑釉陶器・円面硯・墨書土器などが確認されたことは、近接地において、当時としては社会的地位の高い集落が存在したことを裏付けるものである。

(7)中世の遺構についても、廂をもつ大型の掘立柱建物（SB05）が確認されており、当時の同地域において、かなり規模の大きい集落を形成していた可能性が高い。

遺跡名	所在地	遺構番号	平面形	規模(単位：m)	時期
菅野	神戸市西区	SB02	円	径10.5	弥生後期
宅原（内垣）	神戸市北区	SB01	円	径11.5	弥生後期
川除・藤ノ木	三田市	SH25	円	径11.5	弥生後期
		SH52	円	径10.35	弥生後期
		SH53	円	径10.35	弥生後期
家原・堂ノ元	加東郡社町	S1－13	円	長径12	弥生後期
ハゼノ木	西脇市	―――	円	径10.3	弥生中期
森本・上島原	多可郡中町	SB－5	円	径11	弥生後期
国領	氷上郡春日町	竪穴住居5－A	円	径11.5(推定)	弥生後期
		竪穴住居15－A	円	径13.7	弥生後期
		竪穴住居15－B	円	径15.2	弥生後期
城山	揖保郡太子町	住居址Ⅶ	円	径12	古墳前期
		住居址Ⅷ	円	径12	弥生後期
寄井	龍野市	1号住居址	円	径10.54	弥生中期
		10号住居址	円	径11.1(推定)	弥生中期
周世入和	赤穂市	竪穴住居1	円	長径11	弥生後期
寺中	洲本市	住居址A－3－4	円	長径10.8	弥生後期

付表　兵庫県下大型竪穴住居（径又は一辺が10m以上）地名表

20. 玉津田中遺跡　第10次調査

1．はじめに

玉津田中遺跡は、神戸市西部の明石川中流域左岸の沖積地および段丘面に立地する遺跡である。昭和57年より平成３年にかけて、住宅・都市整備公団が施行する「田中特定土地区画整理事業」に伴い大規模な発掘調査が行われ、当遺跡が弥生時代～古墳時代、鎌倉時代を中心とした拠点的集落・墓址遺跡であることが判明した。また「県営平野地区土地改良事業」に伴う調査が、神戸市教育委員会、㈱淡神文化財協会によって行われ、弥生時代～鎌倉時代の集落址、水田遺構を確認している。

同遺跡の北半部を南北に縦断する形で宮前・田中線は路線設定されている。平成５～６年に行われた同事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（その１）では、平安時代の集落址や古墳時代の水田址が確認された。

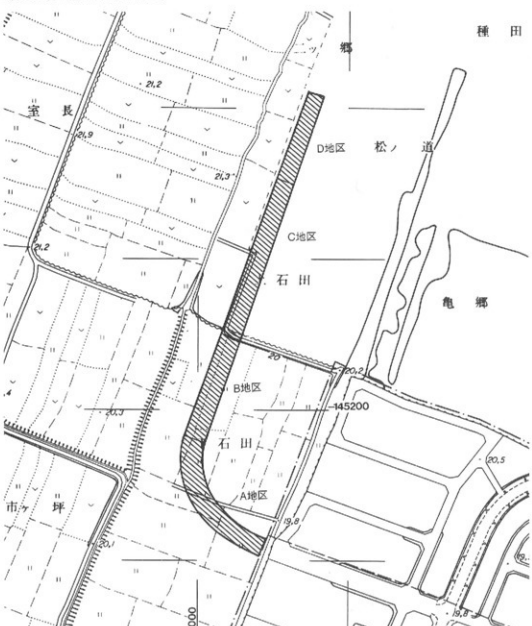


fig. 553
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

①A地区

現況では、南から北に極く緩やかに上がる地形である。1,200㎡を道路確保の都合上、800㎡と400㎡に分割して調査を行った。調査の結果、弥生時代中期の水田遺構、後期の自然流路、中世（鎌倉時代後期頃）の畦畔、溝、ピットを確認した。

基本層序

基本層序は以下の通りである。

①黄褐色混礫砂（盛土）
②黄褐色粘質土（圃場整備前の水田床土）
③黄褐色～灰色粘質土（近世～中世耕作土）
④茶褐色シルト（古墳時代後期の土器含む：北半部に分布）
⑤黄褐色～灰色砂礫（弥生時代中期末の洪水砂：中央部に分布）
⑥黄灰褐色細砂～極細砂（弥生時代中期末の洪水砂：南半部～中央部に分布）
⑦褐色混じり暗灰色シルト（弥生時代中期の水田面：南半部～中央部に分布）
⑧茶灰色～黄灰色系シルト（無遺物層）
⑨黒色粘土（50㎝以上堆積している。無遺物層）

現況地表面から③層までは、約30～80㎝、⑥層までは約1～1.2ｍ、⑨層までは約2～2.6ｍである。

中世

中世耕作土下層（灰色粘質土）を除去した面で遺構を検出した。その結果、東西方向の水田畦畔2条、溝1条、南北方向の水田畦畔1条が検出された。いずれの畦畔も基底部しか検出できなかったが、圃場整備以前に残っていた条里遺構の方向にほぼ一致することが判明した。

東西の大畦畔に平行する形で約3.5ｍ南に幅80～90㎝、深さ15㎝ほどの溝が掘られている。掘られた時期は明らかでない。また、A地区北端の南北方向の畦畔付近で、ピットが2基検出されている。畦畔と溝周辺では、検出面で偶蹄目の動物の足跡（ウシの足跡）が多数発見された。これらは、畦畔、溝と平行方向に歩いていることが判まるものがある。

中世耕作土下層（灰色粘質土）からは、古墳時代～鎌倉時代の土器、陶磁器が出土しているが、最も多いのは、鎌倉時代（13～14世紀）のものである。

度重なる耕作で攪乱されているため、厳密なことは言えないが、この地の条里造成がそれほど古く遡るものではなく、鎌倉時代（13～14世紀）を中心とした時期に設定されたことは間違いない。ただし、生活の場でない耕作地からかなりの量の土器、陶磁器が出土するということが何を意味するのかは、当時の農耕儀礼や習慣の検討が必要であろう。

弥生時代後期

A地区ほぼ中央で、中世の耕作土層を除去したところ、カーブを描く砂礫層が確認された。砂礫層は1.5～2ｍの厚さで堆積しており、一時の大規模な洪水で堆積したものと見なされる。また同層の上端は、中世の耕作で削られており、実際はもっと厚く堆積したようである。なお、この砂礫層は今回の調査地の南側に微高地を形成していると判断できる。

溝

その層の末端部のカーブに沿って、幅1ｍ、深さ20㎝の溝が確認された。溝内から弥生時代後期の土器が出土した。この溝は、調査区外に出ているため、全体の形状が明らかでないが、洪水層が厚く堆積している部分の末端を巡るように掘削されており、調査地南側の微高地に弥生時代後期の集落が存在が想定され、その集落の区画と排水を兼ねた周溝であった可能性が高い。

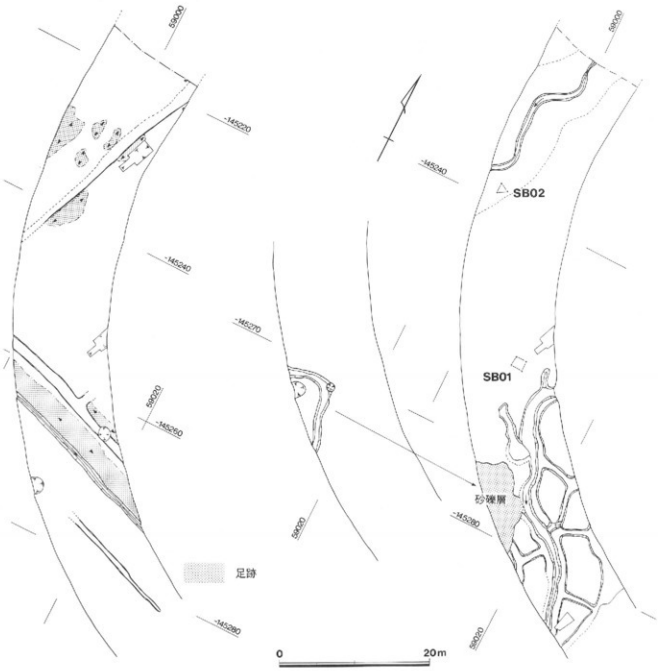


fig. 554　A地区遺構平面図（左：中世　右：弥生時代中期末～後期）

fig. 555　弥生時代中期の水田址

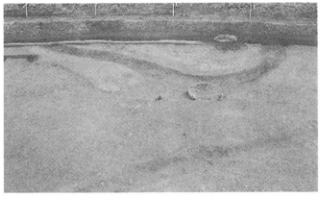


fig. 556　弥生時代後期の溝

弥生時代中期　調査区中央に分厚い砂礫を堆積させた洪水は、周辺に厚さ20㎝の黄灰褐色細砂～極細砂を運んでいる。この層を除去した面（褐色混じり暗灰色シルト）で水田遺構を確認した。

水田遺構　水田遺構は、A地区の中央部～南部にかけて分布し、中央をS字状の用水路が北から南へ流れている。水田は7枚検出された。いずれも不整形で、全周が確認できた水田2は179㎡、水田4は350㎡である。畦畔の残存状態は悪く、畦畔上から水田面までの高さは10㎝程である。また、水田2・3では、用水の水口（落口）が確認されている。

掘立柱建物　水田遺構の南側は、緩やかに下がって、シルト系の土が堆積し、調査区南端に至る。北側は、緩やかに上がり、小規模な掘立柱建物が2棟検出された。

SB01は1×1間の建物、SB02は3本柱の建物で、いずれも直径10～15㎝の柱穴を有する。柱間の距離は1.2～1.5ｍである。規模からみて居住用の施設とは考え難く、物置小屋、番小屋のようなものであると想定される。

なお、この周辺の遺構検出面には、植物の根が張った痕跡が無数に検出され、草の生い茂る空閑地が広がっていたようである。

自然流路　A地区北端には、北から南西方向に調査区を横切って自然流路が確認された。流路の最上層は幅約0.5～1ｍであるが、最初は幅6～10ｍ程度の流れであったことが断ち割り調査で判明した。出土遺物はなかった。

遺構の時期　水田遺構、掘立柱建物、自然流路は時期を判断できる出土土器はないが、弥生時代後期の溝が掘りこまれた洪水の砂礫層が水田遺構の一部を壊しているため、弥生時代後期以前であることが判る。また、平成2年度に兵庫県教育委員会が隣接地を発掘調査しているが、この調査では弥生時代中期末の水田が大規模な洪水によって埋没しており、当該時期の洪水がA地区にある水田遺構も埋没させたと考えるのは妥当であろう。

小　結　A地区は、弥生時代中期以前は、堆積している黒色粘土層などからみて、居住地、耕作地のいずれでもない低湿地であったと推定される。弥生時代中期に南半分は水田として利用されるが、北半分は、小規模な掘立柱建物が建つ以外は自然流路が流れる空閑地となっている。

弥生時代中期末頃に大規模な河川の氾濫によって水田の一部が削られ、水田面には洪水による黄色細砂～極細砂が堆積する。この状況は、兵庫県教育委員会の調査結果と対応している。

洪水によって堆積した砂礫の微高地末端に、周溝が掘られるのが弥生時代後期である。A地区の南側に微高地があり、その上に同時期の集落が想定されうる。

鎌倉時代頃（13，14世紀）条里が設定され、近年に圃場整備が行われるまでその景観は大きく変わっていない。

②B地区　A地区の北側に接し、東西方向の道路に区切られる長さ約70ｍの部分をB地区とした。

基本層序　基本層序は以下の通りである。

①黄褐色混礫砂（盛土）
②黄褐色粘質土（圃場整備前の水田床土）
③黄褐色～灰色粘質土（近世～中世耕作土）
④茶褐色シルト（古墳時代後期の土器含む：南半分に分布）

⑤黄褐色シルト質極細砂（この上面が古墳時代後期の遺構面）
⑥灰褐色砂質シルト（弥生時代の堆積層：安定した堆積状況でない）
⑦灰色～青灰色系シルト・細砂（洪水による堆積層、弥生時代の土器を若干含む）
⑧黒色粘土（無遺物層）

現況地表面から⑤層までは、約80cm～1m、⑧層までは約2～2.5mである。

古墳時代後期　掘立柱建物2棟、柵列、溝、土坑が確認された。

SB01　1×4間以上のほぼ南北を棟方向とする側柱のみで構成される建物である。柱穴掘形内からは、古墳時代後期の土器が若干出土した。

SB02　SB01の南にあり、棟方向を同じくする建物である。桁行3間×梁行2間、側柱のみで構成される。南西端の柱穴が重複しており、柱の取り替えが行われている。また、排水溝が建物の南西端から南東方向にのびているのが確認された。柱穴掘形内からは、古墳時代後期の土器が出土した。

溝　各建物を区画する状態で、溝が数条確認されている。深さは、5～10cm程度である。

柵列　弥生時代の堆積層で検出したが、埋土内に古墳時代後期の土器が出土したため、同時期の遺構と判断した。図上で確認すると、SB01、02間の空閑地を目隠しするように造られている。また一部の柱穴が溝に切られていたが、遺構検出の段階では確認できなかった。

小　結　当地区では、古墳時代後期の掘立柱建物群が確認され、建物を区画する溝や建物間の空閑地を目隠しする柵列が検出された。溝と柵列は重複しており、先に述べた遺構の検出の状況から、柵列が溝に先行するものと思われる。また、二つの建物は建物の配列や同じ棟方向から同時に存在していたと判断するのが妥当である。

なお、弥生時代の堆積層である⑥層では、遺構は確認できなかった。

fig. 557　B地区古墳時代遺構平面図

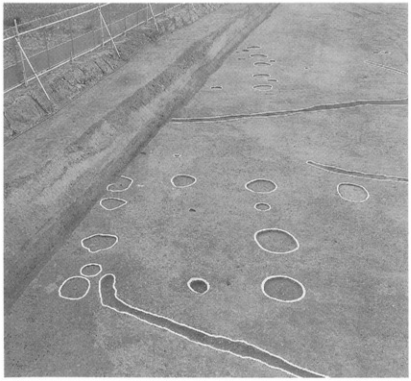


fig. 558　B地区掘立柱建物

③C地区　B地区の北側にある東西方向の道路から北側約110mの部分をC地区とした。

基本層序　基本層序は以下の通りである。

①黄褐色砂礫（盛土）

②黄褐色粘質土（圃場整備前の水田床土）

③黄褐色～灰色粘質土（近世～中世耕作土）

④黄褐色シルト（洪水堆積物）

⑤茶褐色砂質シルト（弥生時代の堆積層、北半部で水田址を確認）

⑥黄褐色細砂～シルト（洪水による堆積層）

⑦灰色～青灰色系シルト・細砂（洪水による堆積層、安定した堆積状況でない）

⑧黒色粘土～シルト（無遺物層）

現況地表面から⑤層までは、約1m～1.4m、⑧層までは約2～2.5mである。

中世　④層の上面で、遺構検出を行ったところ、C地区南端で掘立柱建物1棟が確認された。

掘立柱建物　東西方向2.2m、南北方向1m、1×1間の建物である。番小屋のようなものと推定される。

古墳時代後期　北端部で流路2条が確認された。

SD01　C地区とD地区に跨がって検出された。北西～南東方向へのびる自然流路である。幅約7m、検出時の深さは、約80cmである。粗砂～細砂系の堆積土で埋まっており、洪水で短期間に形成されたものと見なされる。弥生時代～古墳時代後期の遺物が出土した。

SD02　幅約4m、検出時の深さは、約1.4m、断面形はU字形である。SD01と同様に北西～南東方向へのびる自然流路で、土層観察により、堆積土の一部がSD01に削られていることが判かった。底面近くから古墳時代後期の土器が完全な形で出土している。また、植物遺体に混じって、一端が焼けたほぞ穴のある丸太材や板材（長さ約1m）が発見された。

SD03　SD02の南端に接して、幅約1m、深さ約70cmの溝が確認された。流れの方向は他の流路と同様である。南東端でSD02に削られていることが判る。遺物は出土していない。この溝は、弥生時代の水田遺構と接しており、用水路の可能性はあるが確証はない。

fig. 559　SD02遺物出土状況

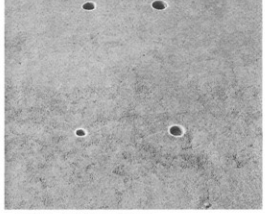


fig. 560　C地区掘立柱建物

弥生時代
水田遺構

C地区南端～中央部にかけて、⑤層茶褐色砂質シルトが堆積している。水田土壌の可能性が高いと考えたが、土層断面や平面では畦畔は発見できなかった。そこで同層を除去し、⑥層黄褐色細砂～シルト面で精査を行うと、北半部のSD02の南側部分で、マンガン分の沈着の違いによる微妙な差によって、畦畔の平面形が確認できる部分があった。

平面プランで見ると、大きな区画と小さな区画の水田があるが、平面形が判然としない部分もあり、正確な水田規模を計測することは困難な状態であった。

自然流路

⑥層上面で遺構検出を行うと、南半部で、北西～南東方向に流れる自然流路が4条確認されたが、いずれも粗砂が堆積しており、遺物は発見されなかった。河川氾濫の溢水が流れたと考えられる。

fig. 561
C地区全景

fig. 562
C地区弥生時代水田址

④D地区　　C地区の北側約65m分、東西方向の道路に接する部分をD地区とした。

基本層序　　基本層序は以下の通りである。

①黄褐色砂礫（盛土）

②黄灰色粘質土（圃場整備前の水田床土）

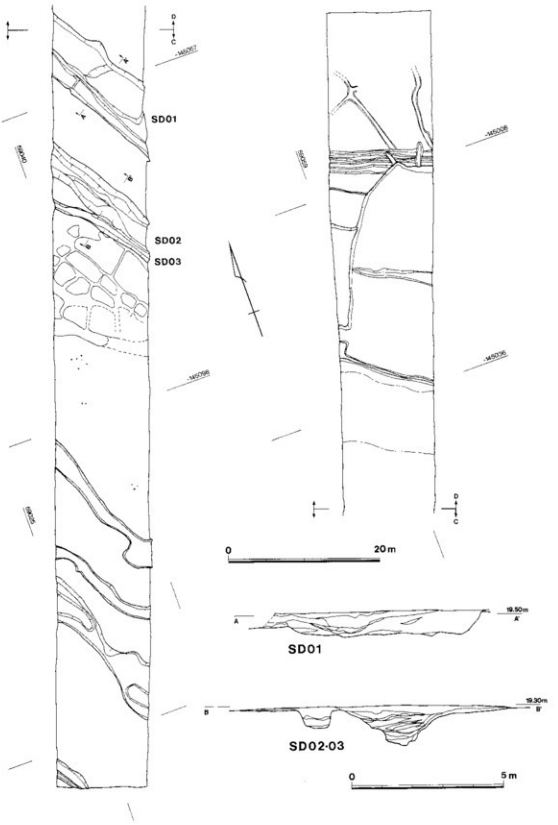


fig. 563
C・D地区
弥生～古墳時代
遺構平面図

③灰色粘質土（中世耕作土）
④暗黄灰褐色シルト混じり細砂（平安時代の土器含む）
⑤褐色～灰色細砂、極細砂（南半部で確認、洪水による堆積層）
⑥褐色混じり暗灰色シルト（古墳時代の水田層）
⑦黄灰色シルト混じり極細砂
⑧灰色～青灰色極細砂（洪水による堆積層）
⑨黒色粘土～シルト（無遺物層）

現況地表面から④層までは、約１m、⑥層まで約1.2 mである。

平安時代　④層を除去した段階で、溝が４条検出された。このうち、３条は、条里の溝方向とは異なる。条里施行以前の遺構である可能性が高い。３条の溝は、平安時代の土器を含む層から掘りこまれている。また、圃場整備施工まで、使用されていた条里溝に削られた状態で、それ以前（鎌倉～室町時代）の溝の一部が同じ場所で確認できた。

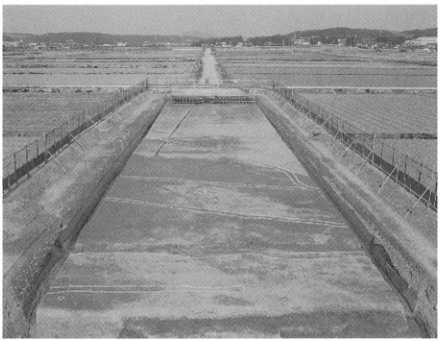


fig. 564　D地区平安～鎌倉時代溝

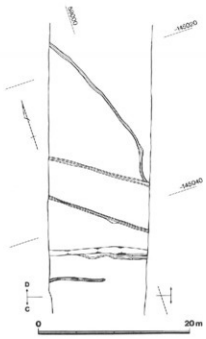


fig. 565　D地区平安～鎌倉時代遺構平面図

古墳時代　南半部では、⑤層褐色～灰色細砂、極細砂が厚く堆積し、⑥層褐色混じり暗灰色シルトの一部を削り取っている。また、⑤層の一部は、⑥層の上に堆積している。土層断面観察の結果、C～D区境界で検出されたSD01は、D区南半部を覆う⑤層と同時期に堆積していることが判明した。規模の大きい氾濫による堆積物と考えられる。出土遺物から、古墳時代後期頃の洪水砂と判断される。

洪水砂

⑥層の上面では、畦畔２条、溝４条が検出された。畦畔の遺存状況は悪く、北端部では消失しており、検出できなかった。また、畦畔は、３条の平行する溝に削られていることが確認されているが、いずれも⑤層によって埋没している。このことから、古墳時代後期頃の氾濫によって埋められた耕作地と判断される。

小　結　D地区では、古墳時代後期頃の耕作地とそれを削り、埋没させる洪水砂、条里施行以前の耕作地（平安時代頃）に伴う溝を確認した。

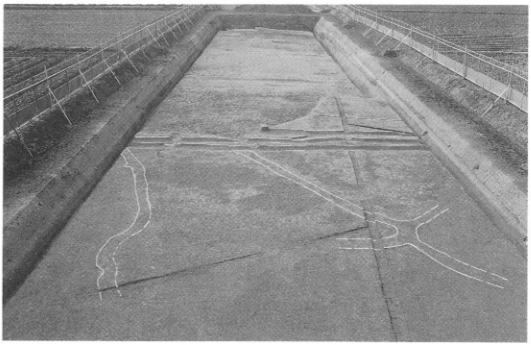


fig. 566
D地区古墳時代後期
水田畦畔

3．まとめ

今回の調査では、弥生時代～鎌倉・室町時代の遺構、遺物が発見された。各時代のおおまかな土地利用状況は以下の通りである。

弥生時代以前　これまでの付近の調査で、縄文時代晩期の生活面が確認された黒色シルト、粘土層では遺構、遺物は確認できなかった。当該期の遺跡分布はごく限られていると判断される。

弥生時代　弥生時代中期の水田址がA地区で、また、弥生時代中期以降の水田址がC地区で確認された。A地区北半～B地区にかけて水田は発見されず、湿地状の地形が広がっている。

A地区では中期の水田址が洪水で埋没し、小規模な微高地が形成される。この部分に後期の段階で溝が掘られ、生活域となった可能性がある。また、中期以前の層は細砂～粗砂層が連続しており、安定した堆積状況ではない。

古墳時代　古墳時代前期～中期の若干の遺物を包含する土壌化が著しい土層が確認され、水田址の存在が想定されるが畦畔、水路等は確認できなかった。

B地区では、河川の氾濫によって微高地が形成され、後期には掘立柱建物群が並ぶ居住域となるが、それ以降の遺構は確認されず、居住域として利用されるのは短期間と判断される。

C、D地区では後期の流路、溝、耕作地、それを覆う洪水砂の堆積が確認された。この時期はまだ河川の氾濫の影響をうける不安定な状態であったことが窺われる。

平安時代　D地区で平安時代の土器を含む土層とそれを掘り込む溝が検出された。溝は条里地割の方向に従わず、この段階では、条里施行は行われていなかった可能性がある。

鎌倉・室町時代　全ての地区で鎌倉～室町時代の遺物を含む灰色～黄灰色粘質土層が一様に堆積している。圃場整備施工時まで存在していた条里地割の畦畔、溝の下層では、これらの層で同様の遺構が重複して見つかり、また牛耕の痕跡が各所で認められることから、耕作地であること間違いない。上記の遺構が条里地割に従うことから、この時代（おそらく13～14世紀頃）に条里施行が行われたと判断される。この時期は土層の堆積状況が安定しており、洪水の影響は全く認められない。

21. 玉津田中遺跡　第11次調査

1．はじめに　玉津田中遺跡は、明石川中流域左岸の洪積段丘から沖積地に拡がる遺跡である。発掘調査は、昭和57年から平成３年にかけて兵庫県教育委員会が、平成元年から平野地区を中心に神戸市教育委員会が継続的に調査を行ってきた。

今回の調査対象地は、字出口、居屋敷、塚町の下水道敷設予定地にあたる。特に出口地区においては、第６次調査地（平成４年度調査）に重複およびその周辺にあたる。第６次調査地では、洪積段丘上に営まれた弥生時代後期から古墳時代初頭の集落址が検出されており、今回の調査においても、同時期の遺構、遺物の検出が予測された。

2．調査の概要　調査は、幅約１ｍ、全長830ｍの汚水管布設予定地ついて、工事影響深度までおこなった。１～９トレンチに区分して調査をおこなった。また、遺構の広がりを把握するため、調査地を東西４区、南北５区間（計20区）に便宜上区分した。調査は、盛土を重機で除去し、遺物包含層以下は人力にて調査を行った。

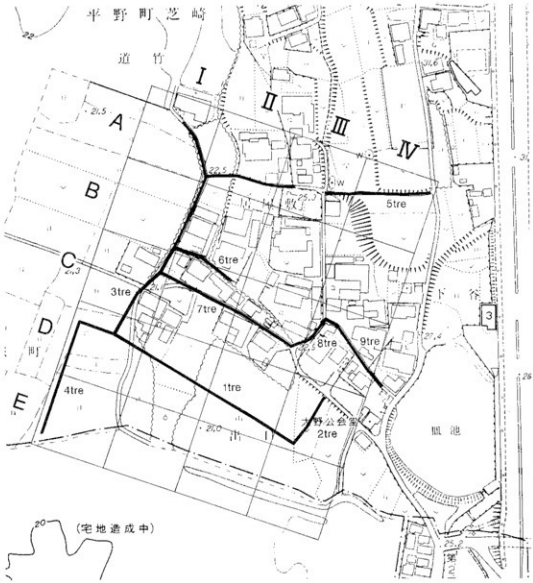


fig. 567
調査地位置図
1：2,500

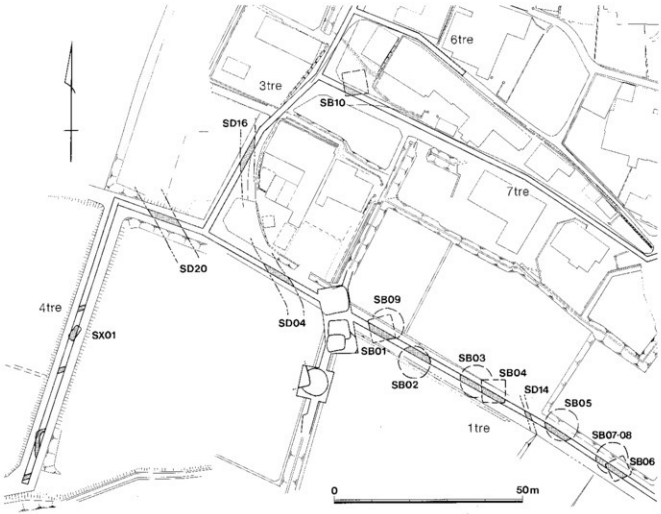


fig. 568　弥生時代後期～古墳時代前期遺構配置図

1トレンチ　洪積段丘上を全長165ｍにわたり貫くトレンチである。Ｄ－Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区は洪積段丘上に位置し、Ｄ－Ⅰ区は沖積地に位置する。Ｄ－Ⅱ区で第６次調査地（平成４年度調査）と重複し、同調査において検出されたSB01を確認した。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居９棟、溝３条、土坑４基、数基のピットを検出した。Ｄ－Ⅲ区以東では、中世の溝３条、ピット75基、土坑１基を検出した。

SB01　周壁に沿って幅約1.1ｍ、高さ約18㎝のベッド状遺構を巡らす方形の竪穴住居である。ベッド状遺構は灰色砂質土と黄灰色土を盛土して構築されたものである。床面には、３基のピットが検出されたが、主柱穴を特定するには至らなかった。火災にあったものと考えられ、炭化材や灰層、焼土塊などが厚く堆積し、床面が加熱によって赤変していた。床面には、放置された土器（壺・甕・高坏・小型丸底壺など）が多数出土した。出土遺物から古墳時代初頭の時期が考えられる。

SB02　周壁に沿って幅約90㎝、高さ約20㎝のベット状遺構を巡らす円形かと思われる竪穴住居である。ベッド状遺構は、黄灰色土の盛土によって造られる。詳細な規模は不明であるが、直径７ｍ以上の住居址と考えられる。柱穴等は検出されなかった。埋土から、弥生時代後期の土器片が多数出土した。

fig. 569　SB01

fig. 570　SB04

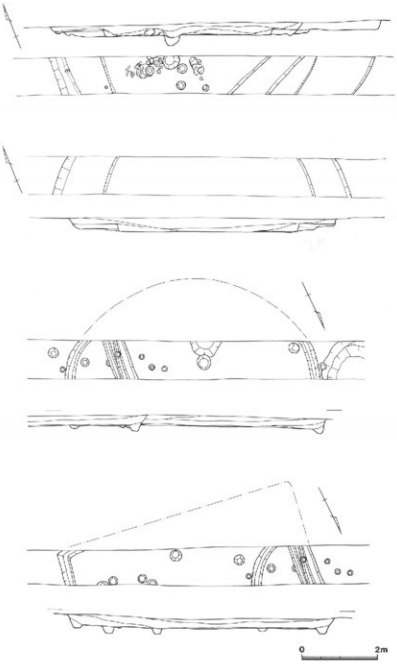


fig. 571　竪穴住居平面・断面図（上から：SB01・SB02・SB03・SB04）

SB03　直径約７ｍ前後の円形の竪穴住居と考えられる。中央に直径約80cm前後の中央土坑が検出され、土坑上面が加熱により赤変し、灰、炭が堆積していた。床面で８基のピットを検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。埋土から少量の弥生時代後期の土器片が出土した。周壁の遺存度は、約25cmである。

SB04　推定東西約６ｍの方形の竪穴住居である。南東隅を検出した。深さ約35cm、周壁に沿って幅約25cmの周壁溝を巡らせている。床面で８基のピットを検出した。主柱穴を断定し難いがＰ－１のピットは、深さ45cmと比較的深く主柱穴の可能性がある。埋土から古墳時代初頭の土器片が出土している。